三重県埋蔵文化財調査報告　33

多 気 郡 明 和 町

斎王宮跡発掘調査報告 Ⅳ

1 9 7 7

例　　言

1．本書は、三重県が国庫補助金の交付をうけて、三重県教育委員会が調査主体となって実施した、多気郡明和町斎宮に所在する斎王宮跡の範囲確認調査の結果をまとめたものである。

2．発掘調査および出土品整理は県文化課山沢義貴、谷本鋭次が、報告書作成は谷本が行なった。

3．発掘調査にあたっては、中川栄之助氏をはじめとして、地元牛葉、竹川、金剛坂地区の方々の協力を得た。

4．本書の遺構標示は下記の略記号による。なお、地形図・トレンチ位置図・遺構平面図の方位は各々、紙面の天を北とした。

ＳＢ　竪穴住居址・掘立柱建物址

ＳＤ　溝　　址

ＳＫ　土　　坑

ＳＥ　井　　戸

5．付Ｉの「斎王表」は、保存修景計画研究会三重作業グループ『三重県風土記の丘、史跡公園建設調査報告書』(昭和48年）所収の福山敏男氏作成のものを再録した。その際一部、「古記録」により増補した箇所もある。また付IIの「斎宮寮の殿舎」表は小王道明の作成による。

6. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　２Ａトレンチの調査……3

Ⅲ　２Ｂトレンチの調査……6

Ⅳ　２Ｃトレンチの調査……7

Ⅴ　２Ｄトレンチの調査……9

Ⅵ　結　　語……12

１）斎王宮跡の調査方法……12

２）斎王宮跡の範囲……13

３）昭和51年度の調査……15

付Ⅰ　斎　王　表……

付Ⅱ　斎宮寮の殿舎……

図　版　目　次

ＰＬ１	斎王宮跡位置図
ＰＬ２	斎王宮跡地形図及び小字名図
ＰＬ３	２Ａ～２Ｄトレンチ位置図
ＰＬ４	２Ａ・２Ｃトレンチ平面図
ＰＬ５	２Ｂ・２Ｄトレンチ平面図
ＰＬ６	２Ａ・２Ｂトレンチ遺物実測図
ＰＬ７	２Ｃトレンチ遺物実測図
ＰＬ８	２Ｃ・２Ｄトレンチ遺物実測図
ＰＬ９	斎王宮跡航空写真
ＰＬ10	２Ａトレンチ全景・ＳＢ409
ＰＬ11	２ＡトレンチＳＫ407・ＳＫ408
	２Ｂトレンチ全景
ＰＬ12	２Ｃトレンチ全景・ＳＢ417
ＰＬ13	２ＣトレンチＳＢ415
	２Ｄトレンチ全景
ＰＬ14	２Ｄトレンチ全景・ＳＫ602
ＰＬ15	出土遺物
ＰＬ16	出土遺物

Ⅰ　前　　言

昭和48年度よりはじまった斎王宮跡の発掘調査は今年度で四年目を迎えた。これまで三ヶ年の調査において、その当初の目的であった斎王宮跡の範囲については大略であるが、つかみえた。しかし、細部については不明である。多くの掘立柱建物址をはじめとして、竪穴住居址、井戸、溝、土坑など多数の遺構を検出した。それらの遺構の中には、古里遺跡で検出したものと、あるいは各トレンチの間での関連を指摘し得るものも見られる。しかし、検出した遺構相互の配置関係、時期的変遷といった点は不明である。更に、土師器、須恵器、多数の灰釉陶器、緑釉陶器などの遺物についても同様のことがいえる。これは、推定される斎王宮跡の範囲が約160ヘクタールという広大なものと考えられるのに対し、これまで発掘調査した面積は古里遺跡の調査を含めても、僅か20,000㎡余であり、２％にも満たない面積である。その上、斎王宮跡の調査は基本的に４ｍ幅のトレンチ調査で拡張調査をやっていないことなどによる。

大略ではあるが、斎王宮跡の範囲がつかみ得たため、この斎王宮跡の保存が問題となってきた。今年度はこれまで三ヶ年の調査の結果を検討し、まとめることを主な目的とし、更に国指定史跡として保存を計るべく対策を考えることとした。このため、発掘調査は補足的なものにとどめた。

発掘調査は51年12月より52年３月にかけ、例年通り作物のない冬期を選んで行なった。トレンチ名はこれまでにひきつづき２Ａ～２Ｄトレンチと呼称した。この間、明和町教育委員会の主体で、昭和50年秋よりひきつづき松阪広域市町村圏道路の事前調査、個人住宅建築に伴なう事前調査を行なわなければならなかった。更に夏には明星の水池遺跡の調査もあった。

広域圏道路は推定される斎王宮跡の中央部分を縦断する形で計画されており、現在の竹神社の東より、真すぐ北にのびる。この道路部分の調査においても多数の遺構、遺物を検出し、多くの新しい知見を得た。特に南部分では大形の掘立柱建物址や溝址が見つかり、Ｏ、Ｎトレンチで検出した遺構と密接な関係があることがうかがわれた。

昭和48年斎王宮跡の調査をはじめた後も、個人住宅があちらこちらに建ちはじめている。それで今年度から町教育委員会が主体で国庫補助事業として個人住宅建築に伴なう事前調査を行なっている。今年度は６戸分の調査をした。

明星の水池遺跡は８月より９月にかけて行なった。斎王宮跡の東方、２㎞の個所である。調査の結果、土師器を焼いた土坑14、掘立柱建物址４、竪穴住居址３、井戸１、粘土溜２などが検出され、斎王宮跡の土師器との関連が注目された。そして、このように土器製作過程を具体的に考えさせる遺跡は全国的にもめずらしく、51年12月に「水池土器製作址」として国史跡に文化財保護審議会より答申された。

斎王宮跡の今年度の調査は次の体制で行なった。

調査主体者　三重県教育委員会

調査指導　福山敏男（京都大学名誉教授）

横山浩一（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）

服部貞蔵（三重大学教授）

門脇禎二（京都府立大学教授）

楢崎彰一（名古屋大学助教授）

調査担当者　小玉道明（三重県教育委員会文化課主事）

伊藤克幸（　〃　）

吉村利男（　〃　）

伊藤久嗣（三重県教育委員会文化課技師）

山沢義貴（　〃　）

谷本鋭次（　〃　）

吉水康夫（　〃　）

調査協力機関　松阪教育事務所

明和町

明和町教育委員会

明和町立斎宮小学校

上記指導委員の他に文化庁文化財監査官坪井清足、同記念物課主任文化財調査官北村文治、皇学館大学助教授渡辺寛の各氏からも有益な助言を得た。

推定宮域範囲 160ヘクタールの中には現在竹川、牛葉、中町、斎王、北野、坂本といった地区が含まれ、土地関係者が 500人を越える。これまでの調査結果にもとづき、史跡指定への対策が種々考えられた。

5月17日、津において指導委員会が開かれ、国指定史跡としての保存が望まれるという方針が打ち出されるとともに、翌52年1月18日には現地斎宮において委員会が開かれ、町当局とも話合いがもたれた。その間、何度となく文化庁からも技官が派遣され、現地を視察された。11月26日には文化庁監査官坪井清足氏による講演が「斎王宮の価値と保存の意義」と題してあった。翌年2月には県教育委員会、明和町、町教育委員会の三者による、指定保存の了解を得るための地元説明会が各地区ごとにもたれ、3月9日には斎宮小学校講堂においての指定説明会で、文化庁主任調査官北村文治氏より「斎王宮跡の保存と指定」と題して、地元住民に文化庁の考え方を説明するとともに協力を訴えた。又、1月19日には三重県議会文教委員の視察もあった。

今年度も三重の文化財と自然を守る会、明和町郷土文化を守る会、伊勢の文化財と自然を守る会等の主催による講演会が開かれた。4月25日、伊勢市において、久徳高文氏「国文学に現われ

た『斎宮』」、岡田精司氏「倭姫伝承の成立と日本武尊」が、6月27日には明和町において、門脇禎二氏「斎王宮とその保存の意義」と題して講演があった。また、発掘中の斎王宮跡での現地見学会も計画され、200名近くの参加者があり、斎王宮跡の保存に対する関心も次第に高まってきた。

II　2Aトレンチの調査

小字「塚山」の南部分で、小字「東裏」と「広頭」のすぐ北側で、この東裏と広頭の境界線の延長部分にあたる。地番は斎宮3326～3328番地である。これは昭和49年のKトレンチの西端部がこの境界の延長部分にまで達しているかどうか不明であった。その上、他のトレンチや広域市町村圏道路部分の調査においては、小字の境界部分では必ず鎌倉時代の遺物を出土する溝址が検出されている。特にU、Vトレンチでは小字の境界に沿って走る大溝があり、それが斎王宮跡の東の限りと考えている。一方、西の限りは古里遺跡の西を流れる祓川と考えられるが、その中間部分の広頭と東裏の境界部分に何らかの区切りをする遺構があるかどうかを確認する必要があった。しかし、この境界部分は現在山林と畑地の境界であり、調査が不可能な状態であった。そのため、境界の延長部分に2Aトレンチを設定することとなった。幅4m、長さ47mである。道路に並行して設定したため、方位とは約10°ずれている。

1）遺　　構

標高12mでほゞ平坦な個所である。層序は耕作土20～30cm。その下に暗褐色土があり、地山は黄褐色である。地山まで約40cm。地山もほゞ平坦であるが、西端より12mの個所で一段西側が10cm程低くなっている。検出した遺構には掘立柱建物址、土坑、溝址などがある。

○掘立柱建物址

SB408　トレンチ東端より6mの個所で検出。2間×3間の東西棟と考えられる。棟方向E4°N、桁行7.4m、柱間は桁行両端が2.4m、中央が2.6mを測る。梁行柱間は2.4m、柱掘り方は径70cmの方形で、深さ30～40cm。北東隅の柱穴内から土師器甕、灰釉陶器片が出土している。

SB409　SB408のすぐ西側で、同じく2間×3間の東西棟と考えられるものである。棟方向はE14°Nと、SB408よりも方位に対して大きくふれる。桁行6.5m、柱間は桁行2.2m、梁行2.4m、柱掘り方は一辺70～80cmの円形で深さ30～40cm。すべての柱穴内から土師器杯、甕、灰

釉陶器の小破片が少量ずつ出土している。

○土　　坑

ＳＫ401　トレンチ西端部で検出。一辺3.2ｍ、第２層の暗褐色土上面より切り込まれて、茶褐色および黒褐色の粘質土が埋っている。深さは地山上面より30cm。pitが3個あるがこの土坑に伴なうものかどうか不明である。小規模だが、あるいは竪穴住居址かもしれない。平安時代の初め頃の土師器杯、甕など多数が出土している。

ＳＫ407　ＳＢ409に重複して検出。1.8ｍ×2.0ｍの不整形な楕円形を呈する。深さ15～20cm、土師器杯、甕などが出土している。

ＳＫ410　トレンチ東端近くで検出。径1.4ｍの円形を呈し、深さ地山上面より50cm。黒色土が埋まり、下層になるに従って土器の出土が多くなり、土師器甕、杯、灰釉壺、瓦器製の風字硯も出土している。

○溝　　址

ＳＤ402　トレンチの西端近くで見つかる。幅1.4ｍ、深さ25cm、南北に走る。南側はＳＫ401と重複している。土師器甕、杯、鉢などが出土。

２）遺　　物

①　平安時代前半の土器（１～９）

土師器甕、杯、鍋、鉢、蓋がある。多くはＳＫ401、ＳＤ402などトレンチ西端部から出土したものである。

土師器甕、鍋、鉢はいずれも口縁部の形状は似通っている。中央部がやや肥厚して、強く外反する。表面は全面縦方向の刷毛目が施されている。内面は甕、鍋は横方向の刷毛目が、鉢はヘラケズリされている。

杯、皿は比較的厚手である。口縁部がヨコナデされる。底部は調整不明なものが多い。それは磨耗がはげしく、一部剝落しているものがあるためである。しかし、４は指による押えがされている。また４には螺旋の暗文が、８には斜行の暗文が施されている。７については暗文は不明である。

蓋は口径22cmの大形で、やや厚手である。調整は天井部をヘラ研磨しているようであり、茶褐色を呈している。

②　平安時代後半の土器（10～37）

土師器杯、甕、鉢、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器製品等がある。ＳＫ407（20～22・26・27・29・30）、ＳＫ410（12・19・31・36）から出土したものが多い。33の緑釉陶器もＳＫ407付近から出

土したものである。

土師器鉢はいずれも同じ形状を呈している。10はやや厚手で、口唇部先端の内側への折れ方が後者に比べ弱い。口縁部をヨコナデしているが、胴部の調整は三者とも異なる。10は上半部は押え、下半部はヘラケズリ、11は上半部は粗い刷毛目、下半部は横方向にヘラケズリ、12は磨耗して刷毛目が全面に施されていたかどうか不明であるが、粘土の継ぎ目が残り、横方向に凹凸が見られる。

他に鉢として30がある。全く形態が異なり口径15cm、器高5.5cmの浅い鉢である。器厚1cm近くの厚手で、指によるナデで横方向の凹凸がはげしく、口縁も正円でなく、また平坦でない。内面に浅い刷毛目が施されている。茶色をおびた赤褐色を呈する。

土師器甕はやや球形に近い胴部を有する小形品である。器厚3mm程の薄手で、口唇部が内側に折れる。胴部は全面粗い刷毛目が施される。胴下半部と口縁外側には、煤の付着が見られる。

土師器杯は深さ4cmの深いものから、僅か1.7cmの浅い皿と呼べるものまで種々ある。比較的薄手で、いずれも口縁部はヨコナデ、杯底部は指による押さえがされ、凹凸がはげしい。胎土は緻密で堅い焼成の良いものである。

31は瓦器製の風字硯である。先端部と両裾部分を欠失している。器厚2mmの薄手である。硯面は、平坦ではなく、僅かに内弯気味で両端の立ちあがりも内弯している。脚は下端部に刻目を有し、外側に突張るようにつけられている。全面細かいヘラ研磨されている。中央部分は横方向に、両脇の部分は縦方向である。中央部分は使用によって、すりへっている。

緑釉陶器には椀と皿とがある。32は径14cmのやや深い椀形土器の口縁部破片である。光沢のある濃緑の釉が厚くかかる。胎土は堅緻で、黒っぽい灰色を呈する。33は口唇部が不明である椀である。底部近くはヘラケズリされており、その後、高台を貼りつけている。釉は濃緑を呈するがあまり光沢はない。地が斑点状になっているためか、釉も斑点状に濃い部分がある。高台の内側には釉がかかっていない。胎土は緻密で、暗灰色を呈する。34は高台部分の小破片である。高台は33に比べて低く、内側は一段低くなる。内面には緑色の釉が厚くかかる。あまり光沢はない。浅い沈線が一条巡り、トチの痕が残っている。一方、表面の釉は光沢があり、高台の内側にも及んでいる。高台は糸切りのあと、ヘラケズリせずに貼り付けているようである。胎土は軟質で緻密で薄い茶色味をおびた灰色を呈する。35は口径18cmの段皿の口縁部破片である。釉は光沢があり、胎土は緻密で、暗灰色を呈する。

36・37は灰釉陶器である。36は口唇部を欠くのみのほゞ完形の小形壺である。細い頸部を有し、下膨れの胴部となる。底部は糸切りの痕を残し、底より2cm程度の高さの個所までヘラケズリしている。底部周辺を除き、淡黄緑の灰釉があつくかかり、頸部には特にあつく流れたようにかけられている。胎土は堅緻で暗灰色を呈している。37は大形の甕の胴下半部の破片である。ヘラケズリされているようであり、淡い黄灰色の釉が刷毛で塗ったように施されている。胎土は堅緻で、

暗灰色を呈する。

③　平安時代末期～鎌倉時代の土器(38～46)

土師器甕、杯、山茶椀、山皿、白磁椀などがある。甕は口径20cmで、口唇部が押えによって平坦となる。口唇部はヨコナデされるが、胴部表面は押えのみで凹凸がはげしい。内面には横方向のうすい刷毛目が見られる。口縁部表面には煤が付着している。やや軟質で白っぽい灰色を呈する。杯は口径14cm、器高３cmのやや大形のものと、僅か口径９cm、器高２cm足らずの小皿のようなものがある。いずれも口縁部のみをヨコナデし、杯下半部は押えのみである。表面はあまり平滑でなく黄褐色もしくは茶褐色を呈する。

以上の他に土錘が３点出土している。いずれも径1.5cm程度の細いもので、軟質な胎土でつくりはあまりよくない。時代については不明。

Ⅲ　２Ｂトレンチの調査

小字「宮ノ前」の東部分の水田で、幅２ｍ、長さ25ｍのトレンチを南北方向に設定した。これは古里遺跡Ｂ・Ｅ地区、Ｐ・Ｉ・Ｌトレンチで検出した幅80cm、深さ70cm程度のＶ字形を呈する溝址ＳＤ170が総延長540ｍ確認されており、この溝址がどこまで続くかを見るためであった。また、水田部分の遺構の保存状況を見る目的もあった。標高10.1ｍを測り、堆積土の層序は耕作土の下に暗茶褐色土が30cm程度あり、地山は黄褐色の砂礫を含む層となっている。

１）遺　　構

ＳＤ170　トレンチ北端より７ｍの個所で、幅60cm、深さ15cmの浅い東西に走る溝を検出した。土師器杯、甕の破片が20片近く出土した。これらはＰ・Ｉ・ＬトレンチのＳＤ170から出土した土器と同時代と思われるものであった。僅か15cm程度でやゝ不明瞭であるが同一の溝址と考えＳＤ170とした。更に東へ続くものと思われる。古里Ｂ地区の奈良時代の大溝から分岐してここまで約650ｍ続くこととなる。

この他にトレンチ西端近くには不定形な溝址、土坑がある。しかし、遺物の出土は殆んど見られなかった。

2）遺　　物

遺物は少なく、実測出来るものは僅かである。50はＳＤ170より出土した土師器甕の口縁部破片である。口径26cmの大形の長甕で、胴部は内外とも刷毛目が施される。うすい茶褐色を呈する。51はトレンチ南端近くで出土したものである。黒色土器で、口径８cm、器高４cmの小形品で、口縁端部は波状となる。高台のすぐ上には鍔状のものがつくが、その先端部が破損して不明。内面は全面黒色で、ヘラ研磨されている。高台は貼り付けで、内側および鍔状の下側は茶褐色を呈する。堅く焼成の良いものであり、硯かとも考えている。52は51の近くで出土した砥石で、幅３cm、長さ5.2cm、厚さ1.4cmで三面をよく使用した痕が見られる。暗青灰色を呈し、砂岩製である。

Ⅳ　２Ｃトレンチの調査

小字「東裏」の北部分に設定したトレンチである。これまでわれわれが調査を進めてきた「斎王の森」の周辺と、いわゆる古里遺跡との間には何らかの南北に走る遺構が存在するのではないかと予想していた。しかし、その予想で設定した２Ａトレンチの調査では何らそれらしきものが得られなかった。そこで、２Ａトレンチより更に100ｍ程西側で、東裏の中央部分を南北に走る農道があり、それをはさむ形で、幅４ｍ、長さ36ｍのトレンチを東西方向に設定した。

一方、これまでの斎王宮跡の調査では、比較的平安時代のものが多く見つかっている。これに対し、西端部の古里遺跡では平安時代のものが少なく、奈良時代、鎌倉時代のものが圧倒的に多く見つかっている。この２Ｃトレンチの設定に際しては、古里遺跡の関連の追求といった目的もあった。

1）遺　　構

標高10.8ｍのほゞ平坦な地形である。道路の西側は現在休耕している畑地である。地山まで地表より20cm足らずである。道路の東側の畑ではやゝ深く30～50cmと東へ徐々に深くなる。耕作土下には黒色土が25cm程堆積している。この黒色土中に遺物が含まれる。地山は赤味をおびた黄褐色粘質土である。耕作時による新しい時代の掘り込みが地山までおよんでいる個所が数ケ所見られる。検出した遺構には竪穴住居址、土坑、溝址がある。

○竪穴住居址

ＳＢ415　道路のすぐ西側、トレンチ西端より15ｍの個所で検出。最初、浅い溝かと考えたが底が平坦であり、東壁の北端部が西に向って僅かに曲がりはじめているため住居址とした。東西径５ｍ、深さ地山上面より20cmである。柱穴は明瞭でないが、pitが数個あり、そのうち、径80cm、深さ50cm程の二個は北側の柱穴かもしれない。また、南西隅には土坑があり、土師器片数片が出土した。カマド、炉址は確認出来なかった。住居址内の堆積土は黒っぽい暗褐色土で、土師器甕、甑、杯、須恵器蓋など多数の土器の破片が出土している。

ＳＢ417　トレンチ北端で検出。径4.5×3.8ｍ、深さ地山上面より30cm、東壁は北側に向ってやゝひろがる。長軸の方向はＮ38°Ｗ、柱穴は不明、黒色土が埋っており多数の土器が出土。土師器杯、甕、高杯などで、須恵器片は僅かである。

○溝　　址

ＳＤ416　ＳＢ415のすぐ東側で検出。幅1.2ｍ、深さ30cm、両側の壁は西側ではゆるやかな傾斜であるが、東側では急になっている。遺物の出土は殆んどない。すぐ東側にも浅い溝が並行して走っている。

○土　　坑

ＳＫ413　トレンチの西端より６ｍの個所で見つかる。径1.8×1.4ｍの楕円形を呈する。深さ33cm。土師器杯、甕、須恵器杯の破片が出土している。すぐ南側にも不規則な土坑が見られるが、いずれも小さな土器片が出土したのみである。

ＳＫ419　トレンチの東端近く、ＳＢ417の西７ｍの個所で検出。径２ｍを測るが、全体の形状は不明、深さ60cm、土師器の小片を多数含む暗黒褐色土が埋っていた。

２）遺　　物

殆んどが平安時代前半の土器で、ＳＢ415（64・67・68・81・89）、ＳＢ417（54・60・61・66・77・78・85・86・93・95・97）から出土したものが多い。

土師器甕、鍋、鉢、甑、杯、皿、高杯、須恵器杯、蓋、壺、円面硯などがある。土師器甕、鍋、鉢はいずれも口縁部の形状がよく似ている。口縁部中央が僅かに肥厚して、口唇部がやゝ立ち気味になるものである。口縁部はヨコナデされ、胴部は内外面ともに刷毛目が全面に施されるものが多い。内面は刷毛目のあと、縦方向のヘラケズリがされているものもある。多くは茶褐色、黄褐色を呈している。

土師器杯には口径に対し、やゝ深く、口縁部が内弯気味に底部より同じカーブで立ち上がる椀状のものと、底部が比較的平坦で、口縁部が真すぐひろがるもの、大きく皿状になるものなどがある。口縁部はいずれもヨコナデされるが、杯下半部の器面調整は指による押えだけのもの（68～72・76・81・92～94）ヘラケズリされるもの（75～78・80・82）もあるが、多くは磨耗がはげ

しく不明である。

高杯は２個体ある。いずれもＳＢ417出土で、よく似た脚部の破片である。杯部との境の部分、裾部分はヨコナデ、筒状部分は縦方向の刷毛目によって２cm幅程度の面取状となっている。褐色を呈している。

須恵器杯は小形品で88は口径11cm、器高2.5cm、底はヘラ切りのままのようである。やゝ黄味をおびた青灰色を呈した、堅い焼きの土器である。

蓋は口径15cm、口唇部が真すぐ立つ。天井部分はヘラケズリされている。胎土は暗青灰色を呈し、細砂を多く含んでいる。

細頸壺は口径９cmの口頸部破片で、口唇部の断面は三角形となり、内側は段状となる。器厚７mmの厚手で、青っぽい黒灰色を呈し、胎土は緻密で焼成は良い。

円面硯はトレンチ中央部、農道の東側より出土したものである。脚裾部の一部が欠失するのみである。径13cm、器高5.3cm、硯面はヘラケズリされており、脚部との境には凸帯が貼り付けられている。脚部は薄手で、裾部で外反する。全面にヘラ描き沈線による斜線が上下二段、方向をかえて交叉させて描いている。又、径７mmの円孔が１個、凸帯の下に穿たれている。表面は黒っぽい青灰色を呈し、内面は黄灰色である。砂粒も多く含み、堅い焼きである。

以上の平安時代前半の土器の他に僅かに平安時代後半と思われる土器がある。それは91の土師器甕や、99の灰釉の壺などである。96は更に時代の下るものである。土錘も四点出土しているが時代は不明である。

Ⅴ　２Ｄトレンチの調査

これまで三ケ年の調査によって一応の斎王宮跡の範囲を把握し得た。しかし、これまでの調査個所は斎王の森の周辺をはじめとする近鉄線の北側の畑部分、それに町並みの南の畑と水田との境界部分とであった。そして、近鉄線と参宮街道との間は家屋が密集して建っており、発掘調査は僅かに昭和51年の広域市町村圏道路部分の調査において、竹神社境内を発掘したのみであった。

そこで、この近鉄線と参宮街道との間の遺構の状況をみるため、２Ｄトレンチを近鉄斎宮駅前の畑に設定した。南北に幅３ｍ、長さ31ｍ、東西に幅４ｍ、長さ20ｍのトレンチで、延べ172 ㎡を調査した。地籍は斎宮3043―１番地である。

1）遺　　構

標高11.6ｍで、ほゞ平坦な畑である。地山まで40～50cmで、耕作土の下には暗褐色土が20cm程ある。部分的に砂礫を多く含む個所もみられる。検出した遺構には掘立柱建物址、土坑、井戸、溝址などがある。

○掘立柱建物址

ＳＢ605　トレンチ西端部で検出。桁行４間の東西棟の建物である。棟方向はＥ４°Ｎで、僅かに方位よりふれる。桁行7.2ｍ、柱間1.8ｍ、梁行は不明である。柱掘り方は方形に近く、径80cm、深さは地山上面より70～80cmである。柱穴内からは平安時代末期頃の土師器杯、甕の破片が出土している。

○土　　坑

ＳＫ602　南北トレンチの中央部分で検出。南北径5.3mの方形を呈する浅い土坑で、深さ地山上面より35cmを測る。土坑内には暗茶褐色土が埋っていた。すぐ西側に幅15cm、深さ30cmの浅い溝が東西に走っている。ともに鎌倉時代の鍋、天目茶椀、灯明皿等が出土している。

ＳＫ603　ＳＫ602のすぐ南側、両トレンチの交わる部分で検出。南北径9.2ｍ、徐々に深くなっており、中央部で深さは地山上面より70cmを測る。埋土は最下層より黒色土、黒褐色土、暗茶褐色土、褐色土となり、褐色土を除いていずれも粘質土である。室町時代の鍋が出土している。

ＳＫ607　ＳＢ605のすぐ南側で検出。ＳＫ602同様方形を呈する土坑である。ＳＫ603に比べてやゝ浅く、地山上面から10cmたらずである。東端が新しいpitによって不明であるが、東西径4.3ｍ程度である。埋土は暗褐色土で、ＳＫ603同様鎌倉時代の鍋、灯明皿等が出土している。

ＳＫ608　すぐ東側で検出。不整形な方形を呈し、東西径3.6ｍ、深さ地山上面より30cm、埋土は黄褐色土が混在する黒色土で、平安時代前半の土器が出土している。

○溝　　址

ＳＤ604　トレンチ南端で検出。東西に走る溝で、幅1.4ｍ、深さ80cmで、底は幅50cmの平坦となる。黒褐色粘質土、黄茶褐色土、黒褐色土が埋っており、鍋、陶器片が出土している。

○井　　戸

ＳＥ601　トレンチ北端で検出、径３ｍ前後の円形を呈すると思われる。素掘りの井戸で約２ｍ掘り下げた。鎌倉時代の天目茶椀、羽釜、擂鉢、灯明皿、青磁椀などの破片が出土している。

2）遺　　物

多くは鎌倉時代から室町時代にかけての土器である。僅かにＳＫ608より出土した平安時代前半頃の土器がある。ＳＫ608からは土師器鍋、杯、蓋（105・107～109）がある。鍋107 は底部

を欠くが、口径23cmの大形品で、器厚も7mm程の厚手である。胴部上半部には粗い刷毛目が部分的に見られ、下半部には煤が付着している。淡い茶褐色を呈し、胎土は緻密である。105も同様の鍋の破片であろう。

杯、蓋はいずれも磨耗がはげしく、口縁部のヨコナデ以外は調整不明である。やゝ軟質な胎土で黄褐色を呈する。116の杯も同時代のものである。

尚、106の甕は時代が下がり、平安時代後半の甕である。口径17cm、口唇部は押えによって平坦となり、肩部はあまり張り出さない。白っぽい黄灰色を呈する軟質な土器である。123の灰釉皿は平安時代後半のものである。段皿の下半部であろうか。淡い黄灰色を呈する堅緻な土器である。

以上の他は全て時代が下り、鎌倉時代より室町時代にかけてのものである。110～114は器厚2mm程度の薄手の鍋である。口縁部の形状をみると、大きく外反し、口唇部がつまみあげられたり、内側に折り曲げられたようになるもの、小さく直角に外反し、やゝ容量の小さいものなどがある。いずれも細かい刷毛目が胴上半部に施され、胴下半部はヘラケズリされている。煤が付着しているものが多い。115は口縁部が直立する壺である。鍋に比べやゝ厚手で、口唇部は押えによって、外側に折り返し状となっている。胴部は球形となり、肩部には耳が一対つくものであろう。茶褐色を呈し、胎土は軟質で緻密である。

117～122は土師器小皿である。口縁部がゆるく外方に開くもの、まるく内弯気味に立ち上がるものがある。いずれも器厚2mm以下の薄手で白っぽい黄灰色を呈し、緻密な胎土で、底には指による押えによって指紋が残っているものもある。125は山茶椀の底部破片である。糸切りのままで、高台を貼り付けており、内部には重ね焼きの痕が残っている。

124・126～129は陶器片である。126～128は天目茶椀で、126は暗茶色の釉が、127・128には淡黄緑の釉があつく施されている。いずれも、底部を糸切りのあと、ヘラケズリによって高台をケズリ出している。胎土は白っぽい灰色で、堅緻である。124・129は皿で、124は口縁部のみに黒色の釉があつくかかる。129は口縁部内側が浅い段状となり、内外に濃緑の釉があつく施されている。いずれも瀬戸焼のものであろう。

Ⅵ　結　　語

1）斎王宮跡の調査方法

延喜式巻第５には「凡溝隍四邊。列殖松柳。并掃除大垣廻及大庭等之事者。……。」と記され、斎宮寮の周囲には大垣、隍がめぐり、四方には門があったことがうかがわれる。これまで四ケ年の調査は、この斎宮寮の範囲を確認することであった。長いトレンチを調査することによって、どこかで隍あるいは築地といったものにあたるのではないかと考えた。そこで、原則的に幅４ｍのトレンチを東西、南北の方向に入れることにした。畑の形状や道路によって、方位にのらなかったトレンチもある。又、調査期間、費用等によって、２ｍ幅のもある。トレンチには調査順にＡ、Ｂ、Ｃとアルファベットを与えた。そして、各トレンチを４ｍ毎に北あるいは西から１、２、３区と順次呼ぶことにした。48年度はＡ～Ｅ、49年度はＦ～Ｐ、50年度はＱ～Ｚ、そして今年度は２Ａ～２Ｄというわけである。

以上のような県教育委員会による宮域の範囲確認調査の他に、町教育委員会が主体になっておこなう個人住宅建設、農道新設、広域市町村圏道路建設などに伴なう事前の発掘調査がある。これらの調査個所の呼称をどうするかということが問題となる。

個人住宅建設に伴なう事前調査では、原則として建物の基礎部分を避けてトレンチを設定するために、発掘調査面積は宅地面積に対して、平均して２割にもならない面積である。その上、宅地が従来の一枚の畑よりも小さく、分筆される場合が多い。この為、個人住宅について、トレンチ名の前に大字名と番地をつけて呼ぶことにした。同じように、広域市町村圏道路や農道新設などの公共事業に伴なう調査では事業名をつけることとした。

ここでは斎王宮跡の遺跡名を６ＡＩＭという記号であらわしている。この次に、県の調査ではトレンチ名がくるわけであるが、個人住宅が仮に牛葉地内の2680―１番地で建設される場合、牛―2680―１となり、その次にトレンチ名、遺構名、日付等がくるわけである。

しかし、今後調査が進むにつれて、これまで通り、トレンチ調査のみではなく、ある程度の広さをもつ、例えば畑一枚とかいった面的な調査が必要となってくると思われる。その場合、調査個所の呼称を根本的に考えなおさなくてはならない。この場合、斎王宮跡の範囲の基本線を設定して、ある決った間隔で方眼をつくり、それぞれ大区画、小区画として、グリッドを決める方法がまず考えられる。しかし、この方法では、一枚の畑が区画をこえてひろがる可能性があり、調査時の呼称がかえって繁雑となる。そこで現在のところでは、次のようにするのが妥当ではないかと考えている。まず、斎王宮跡を南北に走る主要な道路等によって区切って、南北に細長い大区画を設定する。次にこの大区画を東西に走る農道や水路等によって区切り小区画とする。この

小区画の中には20～30枚程度の畑、水田或は宅地が入るようにする。そして、この畑や水田に順次記号を与えることにする。これで斎王宮跡内の個々の畑、水田等の記号化が出来たことになる。例えば、大区画を西よりA、B、C……と、小区画を北よりA、B、C……とし、一枚ごとの畑等に数字を与えると、ある畑を（B—C—16）とか、（D—A—7）とか呼ぶことが出来る。この畑を発掘毎にグリッドを設定すればよいわけである。

一方、48年度の発掘調査の段階より、この地域の1000分の1の地図の作成をはじめた。空中写真測量図化をして、座標には国土調査法施行令にもとづく平面直角座標第6系を使用している。このため、我々がトレンチ調査をした測量図にこの座標を利用することとした。そこで、写真図化作業に際し基本点として、コンクリート杭を18点設置した。その後、50年度にはこれらでは不足である上、破壊される例もあり、更に18点を設置した。この50年度の基本杭の測量には奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの協力を得た。これまで、合計36点の基本杭を設置したが、既に数点が破壊されてしまっており、又、新しい住宅建設によって利用しにくい点もあり、基本点を更にふやさなければならないと考えている。

斎王宮跡の範囲はこの第6系によれば次のようになる。

東	Y	57km 540m
西	Y	55km 450m
南	X	−162km 750m
北	X	−161km 500m

2）斎王宮跡の範囲

昭和47年、「風土記の丘、史跡公園建設調査」として、斎王宮跡をはじめとして、伊賀御墓山古墳、志摩国分寺跡の三ケ所についての保存計画を、京都大学工学部保存修景計画研究会（代表福山敏男氏）に委託して行なった。この中で斎王宮跡については、文献的調査が行なわれている。福山先生によれば、斎宮寮の範囲について、次のように記されている。「その敷地は少なくとも諸国の国衙ほどの土地を必要としたであろうし、さらに大宰府の政庁に比肩するほどの広さであったとも考えられるよう。つまり少なくとも方2町を占めていたのは当然であり、方3町とか方4町とかの程度の敷地をも想定しておくべきであろう。」

幕末より明治初年にかけて、伊勢神宮の神主であった御巫清直は、斎宮について研究をすすめ、各種の論文をあらわしている。その中に、斎宮寮廃絶後にかかれた紀行文や地誌類の記述と、自分自身の実地踏査によって書き記した「斎宮寮廃蹟考」「斎宮寮廃蹟図」がある。斎宮寮の範囲については明言していないが、廃蹟図によれば、斎王の森を北側の中心にして、東は現在の竹神

社のすぐ西側の線、西は小字広頭と、宮ノ前の境で牛葉より坂本へ抜ける農道の部分、南は小字牛葉の南限までと考えていたようであり、御館、宮ノ前、上園、下園、楽殿といった小字が含まれる。

一方、今年度の指導委員会において、指導員の先生から、これまで三ケ年の調査個所が斎宮寮の内部であろうという根拠として、次のような点を指摘された。

① 斎王の群行や、勅使の日記に記された経路、地名によって確定できる。

② 斎王宮跡についての伝承地が、多気郡内にはここ以外にない。

③ 掘立柱建物址の規模、配列により、公的な施設しか考えられず、公的施設としては斎宮寮以外にはない。

④ 緑釉陶器は、全国で270個所から発見されているが、平城、平安京以外には出土量が全国最大であり、当然、斎宮寮で使用されたものであろう。

これまでの調査で見つかった掘立柱建物址、緑釉陶器などの発見場所をみると、相当のひろがりをもっていることがわかる。掘立柱建物址は古里遺跡においても60棟近くみつかっている。これまでの斎王宮跡の発掘調査でも、４ｍ幅のトレンチ調査のため、不確かなものも含まれるが、50棟近くあり、東側ではＴ、Ｖトレンチでも見つかっている。ただ、Ａトレンチの北部分やＢトレンチでは検出されていない。この掘立柱建物址のあり方は、緑釉陶器の出土状況についてもあてはまる。即ち、緑釉陶器は一部のトレンチを除いては、各トレンチより満遍なく出土しており、どこが中心とはいえない状態であるが、Ａ、Ｂトレンチからは殆んど出土していない。このように、これまで調査をしてきた個所の殆んどが斎宮寮の内部と考えられる状況である。

北の限　古里遺跡Ｂ、Ｃ地区で検出した大溝は、幅２ｍ、深さ2.5ｍという大きなもので、Ａトレンチ中央、広域圏道路、Ｔトレンチにおいて見つかっている。これを結ぶ線は古里遺跡と東側の東前沖の部分を除いて、いずれも小字の境界に一致する。そして、その部分は東及び西に比べ、大きく北に迂回した格好となっている。この部分での大溝の北側では、遺構や遺物も少なく、大溝が斎宮寮の廃絶する頃に埋ったと考えられることから、この大溝が一つの区画をしていたものと思われる。ただＴトレンチや古里遺跡では大溝の北側部分でも遺構、遺物が多数見られることよりして、更に北にひろがるであろうと思われる。

東の限　Ｔトレンチの東、東加座、東前沖、鍛冶山の東は一直線に南北に走り、現在も水路と農道となっている。ここに設定したＵ、Ｖトレンチでは、北側で見つかった大溝から続くと思われる溝が農道のすぐ東でみつかっており、Ｖトレンチでは水路の西側にも溝がもう一条南北に走っていた。東側の大溝は古里遺跡Ｂ、Ｃ地区やＡ、Ｔトレンチの大溝同様、鎌倉時代の遺物を出

土している。この溝より東側では殆んど遺物の出土は見られない。

南の限 旧参宮街道の南、現在の家並の南側の畑と水田との境界の近くに南北方向に設定した・Q、R、S、W、Yトレンチでは Qトレンチを除いて、良好な遺構、遺物は皆無であった。しかし、Qトレンチでは緑釉陶器76点をはじめ、掘立柱建物址も見つかり、畑と水田の境界部分では、北や東で見つかった溝に比較すると規模は小さいが、幅２ｍ、深さ80cmの溝が見つかっている。出土した緑釉陶器は平安時代の後半と思われる。この溝址より南側は水田で平坦な面が続き、遺構、遺物は殆んど見られない。

西の限 今年度調査した２Ａ、２Ｃトレンチ、更に古里遺跡のすぐ南の部分での個人住宅建設に伴なう調査においては、掘立柱建物址、竪穴住居址をはじめ、円面硯、緑釉陶器も出土しており、当初予想していた斎王宮跡と古里遺跡との間を区画するものは何ら検出されなかった。却って、古里Ｂ、Ｃ地区よりＰ、Ｉトレンチへと続く溝や道路跡がみつかっている。これまでの古里遺跡の調査においても、各種掘立柱建物址、蹄脚硯、大形土馬、緑釉陶器も見つかっており、その上、この地が斎王が禊をしたという祓川に接しており、斎宮寮とは密接な関係のある地であり、斎王宮跡の一部とも考えられ、西の限りは祓川とすることができよう。

以上のように見てくると、斎王宮跡の範囲は、当初の予想のように方２町とか、斎王の森を中心とした小規模なものではなく、実に東西約2000ｍ、南北900ｍ近くの広大なものである。勿論、調査がまだ行き届いていない個所も多く、細部については不明確な点を多く含んでいるが、一応以上のようになるであろう。

３）昭和51年度の調査

今年度の県教育委員会による発掘調査は僅か580㎡を調査したにすぎない。殆んどが町教育委員会による昭和50年11月よりつづいている広域市町村圏道路部分の調査であった。又、個人住宅建設に伴なう事前調査もあった。

古里遺跡の関連より、２Ａ、２Ｃトレンチを設定したが、当初予想した斎王宮跡の西の限を示す何らかの遺構といったものは見つからなかった。それでも、２Ａトレンチは平安時代後半の掘立柱建物址、土坑が見つかり、緑釉陶器も26点出土したのに対し、２Ｃトレンチでは平安時代初頭頃と思われる竪穴住居址があり、これまでの古里遺跡の調査結果に似たものであった。このため、やはりこの２Ａ、２Ｃトレンチの間には何らかの区画する遺構を予想したが、現在の畑の区画からは考えられず、その後、県道竹川、南藤原線の西側で個人住宅建設に伴なう事前調査を行なった。そこは、古里Ａ地区より南へ40ｍ程の個所で、僅か40㎡を調査したのみであったが、緑釉陶器片も６点出土しており、その内一点はほゞ完形のものであり、平安時代の遺構がこの個所

までひろがっていたことが明らかであった。この点からも、西の限は竹神社旧地のある台地縁辺、更には祓川まで及ぶものと考えられた。

２Ｂトレンチは古里Ｂ、Ｅ地区、Ｐ、Ｉ、Ｌトレンチで確認した溝址ＳＤ170が水田部分までおよぶのかどうかを見るために設定した。その結果、僅かであるがその溝を確認し得た。遺物も少量であるが同時代のものが出土している。結局、古里Ｂ地区よりこの２Ｂトレンチまで延長約650ｍ続くことになる。溝底の標高を見ると、Ｅ地区の北端では11.8ｍ、南端で11.2ｍ、Ｐトレンチで10.65ｍ、Ｉトレンチで9.85ｍ、Ｌ、２Ｂトレンチでは9.75ｍと東に向って下っていることがわかる。このＳＤ170は古里Ｂ地区の大溝が途切れる個所より分れて東へ向ってのびるものであるが、大溝は幅３ｍ、深さ１ｍとＳＤ170よりずっと大きく深い。この大溝へ一旦水をため、東へとり入れたものであろうか。

次に２Ｄトレンチである。近鉄線より南側の宅地化された部分での遺構の保存状況をみる目的であった。その結果、掘立柱建物址をはじめとして平安時代の遺構があるが、その個所に室町時代以降の遺構が多数重複していることがわかった。この後、調査した竹神社東部分の広域圏道路の調査においても平安時代後半、末頃の掘立柱建物址、土坑、溝址等が見つかり、近鉄線の南側にも遺構が良好に残っていることが判明した。

付Ⅰ　斎　王　表

天皇	斎王	系統	卜定	初斎院入り	初斎院より退下	野宮入り	野宮より退下	群行	寮にて薨去	退下	在任年数	在伊勢年数
崇神	豊鍬入姫	皇女	6年							垂仁25年	?	
垂仁	倭姫	〃	25							不明	不明	
景行	五百野皇女	〃	20							不明	不明	
成務～安康	—											
雄略	稚足姫（栲幡姫）	〃	不明							3	不明	
清寧～武烈	—											
継体	荳角皇女	〃	不明							不明	不明	
安閑～宣化	—											
欽明	磐隈皇女	〃	不明							不明 ⑥	不明	
敏達	菟道皇女	〃	7.3							不明 ⑥	不明	
用明～推古	酢香手姫	〃	用明前年 9.19							推古29年	37	
舒明～天智	—											
天武	大来皇女	〃	2.4.14 泊瀬斎宮					3.10.9		朱鳥1.9.9 ② 〃 1.11.16	14?	13
持統	—											
文武	当耆皇女	天武皇女	2.9.10							大宝1?	4?	4?
	泉 *	天智皇女	大宝 1.2.16					慶雲 3 閏正 28		慶雲3?	6?	1?
	田形 *	天武皇女	慶雲 3.8.29							慶雲3?	1?	1
	多紀 *	天武皇女	慶雲 3.12.6							不明	不明	不明
元明	—											
元正	久勢 **	不明	不明					養老 1.4.6		養老5?	不明	5?
元正～聖武	井上 *	聖武皇女	養老5.9.11 北池辺斎宮					神亀 4.9.3		不明	不明	不明
聖武	県 **	不明	不明					天平 18.9.3		天平感宝 1.閏5.11.④	不明	4
孝謙	小宅 **	三原王女	天平勝宝1.9.6							不明	不明	不明
淳仁	山於 **	不明	天平宝字2.8.19?					天平宝字 5.9.3?		不明	不明	不明
称徳	—											
光仁	酒人 *	皇女	宝亀3.11.13 春日斎宮					宝亀 5.9.3		宝亀6?	4?	2?
	浄庭 **	神王女	宝亀6?					不明		天応1?	7?	5?
桓武	朝原 *	皇女	延暦1.8.1 平城					延暦 4.9.7		延暦15.3. 帰京	15	12
	布勢 *	皇女	延暦 16.4.12			延暦 16.8.21		延暦 18.9.3		延暦25.3.17 ② 〃 25.4 帰京	10	8
平城	大原 *	皇女	大同 1.11.13			大同 2.8.24		大同 3.9.4		大同4.4.1 ① 〃 4.6.?帰京	4	2

天皇	斎王	系統	卜定	初斎院入り	初斎院より退下	野宮入り	野宮より退下	群行	寮にて薨去	退下	在任年数	在伊勢年数
嵯峨	仁子 *	皇女	大同 4.8.11			大同5.?		弘仁 2.9.4		弘仁14.4.16 ① 〃 14.6.?帰京	15	13
淳和	氏子 *	皇女	弘仁 14.6.3			天長 1.8.14		天長2.?		天長4.?帰京 ⑤	5	3?
	宣子 **	仲野親王女	天長 5.2.13以前			天長6.?		天長 7.9.6		天長10.2.28 ① 〃 10.4.?帰京	6	4
仁明	久子 *	皇女	天長 10.3.26			承和 1.9.10		承和 2.9.5		嘉祥3.3.21 ② 〃 3.5.?帰京	18	16
文徳	晏子 *	皇女	嘉祥 3.7.9			仁寿 1.8.26		仁寿 2.9.7		天安2.8.27 ② 〃 2.10 帰京	9	7
清和	恬子 *	文徳皇女	貞観 1.10.5	貞観 1.12.25		貞観 2.8.25		貞観 3.9.1		貞観18.11.29 ① 元慶1.? 帰京	18	17?
陽成	識子 *	清和皇女	元慶 1.2.17	元慶 ⓐ 1.?		元慶 2.8.28		元慶 3.9.9		元慶4.12.4 ③ 〃 5.2 帰京	5	4
	掲子 *	文徳皇女	元慶 6.4.7	元慶6?		元慶 7.8.24	元慶 ① 8.2.13	—		—	3	—
光孝	繁子 *	皇女	元慶 8.3.22	元慶 ⓐ 8.8.13		仁和 1.9.18		仁和 2.9.25		仁和3.8.26 ② 〃 3.10 帰京	4	2
宇多	元子 **	本康親王女	寛平 1.2.16	寛平1?		寛平 2.9.5		寛平 3.9.4		寛平9.3.19	9	7
醍醐	柔子 *	宇多皇女	寛平9.8.13 以前	昌泰 1.4.25		昌泰 1.8.22		昌泰 2.9.8		延長8.9.22 ① 〃 8.12	34	32
朱雀	雅子 *	醍醐皇女	承平 1.12.25	承平 ⓑ 2.6.10		承平 2.9.10		承平 3.9.26		承平5 冬 ④ 〃 6.5 帰京	6	5
	徽子 ** (斎宮女御)	重明親王女	承平 6.9.12	承平 ⓐ 7.7.13		承平 7.9.27		天慶 1.9.15		天慶8.1.18 ④ 〃 8.8.?	10	8
村上	英子 *	醍醐皇女	天慶 9.5.27	天慶9.	天慶 ⑦ 9.9.16	—		—		—	1	—
	悦子 **	重明親王女	天暦 1.2.26	天暦 ⓒ 1.9.25		天暦 2.9.26		天暦 3.9.23		天暦8.9.14 ④ 〃 8.? 帰京	8	6
	楽子 *	皇女	天暦 9.7.17	天暦10.?		天暦10.?		天暦 11.9.5		康保4.5.25 ② 〃 4.11	13	11
冷泉	輔子 *	村上皇女	安和 1.7.1	安和 ⓔ 1.12.25	安和 ① 2.11.4	—		—		—	2	—
円融	隆子 **	章明親王女	安和 2.11.16	天禄 ⓕ 1.9.8		天禄 1.9.30		天禄 2.9.23	天延2. 閏10.16	—	6	4
	規子 *	村上皇女	天延 3.2.27	貞元 ⓖ 1.2.26		貞元 1.9.21		貞元 2.9.16		永観2.8.27 ① 〃 3.4.3帰京	10	9
花山	済子 **	章明親王女	永観 2.11.4	寛和 ⓗ 1.9.2		寛和 1.9.26	寛和 ⑥ 2.6.22	—		—	3	—
一条	恭子 **	為平親王女	寛和 2.8.8	永延 ⓑ 1.?		永延 1.9.13		永延 2.9.20		寛弘7.11.7 ④ 〃 8.5.25帰京	25	24
三条	当子 *	皇女	長和 1.12.4	長和 ⓑ 2.8.21		長和 2.9.27		長和 3.9.20		長和5.1.29 ① 〃 5.9.3帰京	5	3
後一条	嬉子 **	具平親王女	長和 5.2.19	長和 ⓑ 5.9.15		寛仁 1.9.21		寛仁 2.9.8		長元9.4.17 ② 〃 9.8.?帰京	21	19
後朱雀	良子 *	皇女	長元 9.11.28	長暦 ⓘ 1.4.3		長暦 1.9.17		長暦 2.9.11		寛徳2.1.16 ① 〃 2.? 帰京	10	8
後冷泉	嘉子 *	敦明親王女	永承 1.3.10	永承1.?		永承 2.9.14		永承 3.9.8		永承6.1.8 ④ 〃 6.? 帰京	6	4
	敬子 **	敦平親王女	永承 6.10.7	永承 ⓘ 7.4.25		永承 7.9.28		天喜 1.9.14		治暦4.4.19 ② 〃 4.8.24退下	18	16
後三条	俊子 *	皇女	延久 1.2.9	延久1.?		延久2.		延久 3.9.23		延久4.12.8 ① 〃 5.? 帰京	4	3
白河	淳子 **	敦賢親王女	延久 5.2.16	延久5.?		承保1.		承保 2.9.20		承暦1.8.17 ④ 〃 1.12.9帰京	5	3
	媞子 * (郁芳門院)	皇女	承暦 2.8.2	承暦 ⓘ 2.9.1		承暦 3.9.8		承暦 4.9.15		応徳1.9.22 ④ 〃 1.12.4帰京	7	5
堀河	善子 *	白河皇女	寛治 1.2.11	寛治 ⓓ 1.9.21		寛治 2.9.13		寛治 3.9.15		嘉承2.7.19 ② 〃 2.12.30帰京	21	19
鳥羽	姸子 *	白河皇女	天仁 1.10.28	天仁 ⓚ 2.4.14		天仁 2.9.15		天永 1.9.8		保安4.1.28 ① 〃 4.? 帰京	16	14
崇徳	守子 *	輔仁親王女	保安 4.6.9	天治 1.4.23		天治 1.9.27		天治 2.9.14		永治1.12.7 ① 康治1.8 帰京	19	17

天皇	斎王	系統	卜定	初斎院入り	初斎院より退下	野宮入り	野宮より退下	群行	寮にて薨去	退下	在任年数	在伊勢年数
近衛	姸子 *	鳥羽皇女	康治 1.2.25	康治 ⓘ 2.2.22		康治 2.9.27		天養 1.9.8		久安6.5.10 ⑤ 〃 6.7.26帰京	9	7
	喜子 *	堀河皇女	仁平 1.3.2	仁平 ⓙ 1.9.19		仁平 2.9.30		仁平 3.9.21		久寿2.7.23 ② 保元1.11.4帰京	5	3
後白河	亮子 * (殷富門院)	皇女	保元 1.4.19	保元 ⓘ 1.?		保元 2.9.15	保元 ① 3.8.11	—		—	3	—
二条	好子 *	後白河皇女	保元 3.12.25	平治1.?		平治1.?		永暦 1.9.8		永万1.6.25 ① 〃 1.12.19出立	8	6
六条	休子 *	後白河皇女	仁安 1.12.18	仁安 ⓘ 2.6.28		仁安 2.9.21	仁安 ① 3.2.19	—		—	3	—
高倉	悼子 *	後白河皇女	仁安 3.8.27	嘉応 ⓙ 1.5.9		嘉応 1.9.27		嘉応 2.9.10	承安 2.5.3	—	5	3
	功子 *	皇女	治承 1.10.28	治承 ⓙ 2.?		治承 2.9.14	治承 ④ 3.1.11	—		—	3	—
安徳	—											
後鳥羽	潔子 *	高倉皇女	文治 1.11.15	文治 ⓓ 2.5.23		文治 2.9.28		文治 3.9.18		建久9.1.11 ① 〃 9.8.23?	14	12
土御門	粛子 *	後鳥羽皇女	正治 1.12.24	正治 ⓓ 2.5.26		正治 2.9.27		建仁 1.9.9		承元4.11.25 ① 建暦1.4 帰京	12	11
順徳	熙子 *	後鳥羽皇女	建保 3.3.14	建保 ⓓ 3.9.21		建保 4.9.20		建保 5.9.14		承久3.4.20 ① 〃 3.8.20帰京	7	5
仲恭	—											
後堀河	利子 * (式乾門院)	守貞親王女	嘉禄 2.11.26	安貞 ⓓ 1.4.29		安貞 1.9.24		安貞 2.9.19		貞永1.10.4 ① 〃 2.2.5帰京	7	5
四条	昱子 *	後堀河皇女	嘉禎 3.11.24	暦仁 ⓓ 1.9.8		暦仁 1.9.22		延応 1.9.16		仁治3.1.9 ② 〃 3.2.20帰京	6	4
後嵯峨	曦子 * (仙華門院)	土御門皇女	寛元 2.12.16	寛元 ⓓ 3.8.13		寛元 3.9.17	寛元 ① 4.1.29	—		—	3	—
御深草	—											
亀山	愷子 *	後嵯峨皇女	弘長 2.12.4	弘長3.?		弘長 3.9.26		文永 1.9.9		文永9.2.17 ③ 〃 9.8.13出立	11	9
後宇多	—											
伏見	—											
後伏見	—											
後二条	奨子 * (達智門院)	後宇多皇女	徳治 1.12.22	徳治 ⓚ 2.9.23		徳治 2.9.27	延慶 ② 1.8.26	—		—	3	—
花園	—											
後醍醐	懽子 * (宣政門院)	後醍醐皇女	元徳 2.12.19	元弘1.?		元弘 1.8.20	元弘1.	—		—	2	—
	祥子 *	後醍醐皇女	元弘 3.12.28	不明		不明	不明	—		—	不明	—

摘　　要

○　この表は主として『神宮要綱』にのせる歴代斎王表によったが、『古事類苑』神祇部斎宮の条、『史料綜覧』巻1～5によって補正した。

○　斎王の名の次の＊印は内親王を、＊＊印は女王を示す。

○　仲哀皇女伊和志真内親王を斎王とする『二所太神宮例文』の説は、『古事記伝』や『古事類苑』に記すように、疑わしいので、採らなかった。

○　続日本紀に慶雲3年12月多紀内親王が伊勢大神宮に参ったとあるのは、『古事類苑』の編者は単なる参拝であったと解するが、古く『類聚国史』にも伊勢斎宮の部に入れてあるので、一応採録した。

○　『一代要紀』の元明天皇の条には智努女王、円方女王が斎王となったように記すが、『古事類苑』の編者がいうように、他書に見えず、疑わしいので、除外した。

○　『一代要記』にのせる山於女王と、二所太神宮例文にいう安陪内親王は同人と思われる。後者は孝謙天皇と同名であり、疑わしいので、いま前者を採った。

○　『日本紀略』承平６年５月１日条に「前斎宮斉子内親王薨」とあるのは疑わしいので採らなかった。

○　養老５年に平城宮の北池辺に新造された斎宮を、『古事類苑』の編者は初斎院の初見としているが、これは宮外の地であるから、野宮に相当するものと思われる。初斎院は貞観元年の記事に始まるから、平安時代に創められた制度であろう。初斎院にはⓐ雅楽寮、ⓑ宮内省、ⓒ主殿寮、ⓓ左近衛府、ⓔ右近衛府、ⓕ主水司、ⓖ侍従厨家、ⓗ左兵衛府、ⓘ大膳職、ⓙ一本御書所、ⓚ諸司などが宛てられた。

○　群行の欄は主として出京の日を示す。伊勢斎宮寮到着は数日後である。

○　退下の欄に二つの日付がある場合は、上の日付は国喪、親喪その他による斎王資格消失の時を示す。早くてそれから２日目に、京都からの報知が斎宮寮に届くと、斎王は御厘殿または頭宿館に下る慣例であった。

同欄の下の日付は帰京または出立の時を示す。報知から数ヵ月の間は伊勢に留ってから帰京するのが通例となっている。

○　斎王退下の理由は、退下の欄に次のような番号をもって記入した。

①　天皇譲位	⑤　斎王病気	
②　天皇崩御	⑥　事　　故	①⑤退下路は群行路に同じ
③　上皇崩御	⑦　斎王薨去	②③④退下路は難波経由
④　父 母 喪		

○　在任年数と在伊勢年数は共に数え年で示す。

○　なお歴代斎王に関する資料としては、つぎのものがあるが、今後さらに細かく整理する必要がある。

『類聚国史』巻４　伊勢斎宮の条

三善為康『懐中歴』（大治３年ごろ撰）（二中歴に引く）

藤原資隆『簾中抄』（治承ごろ撰）（改定史籍集覧23）

『二中歴』第１（嵯峨～後嵯峨天皇の間の斎王）（尊経閣叢刊、改定史籍集覧23）

『帝王編年記』（鎌倉末期撰）（国史大系）

『一代要記』（鎌倉後期撰）（改定史籍集覧１）

『二所太神宮例文』（伊勢斎内親王の条）（群書類従神祇部）

東坊城和長『本朝女后名字抄』（一名、貴女抄、享禄２年以前撰）（群書類従雑部）

荒木田延豊『斎宮記』（群書類従補任部）

『神皇雑用先規録』（江戸初期か）（続群書類従神祇部）

度会延経『伊勢斎宮部類』（一名、斎宮部類）５巻５冊（写）

千萱義利『斎宮部類補遺』１冊（神宮文庫蔵）

薗田守良『神宮典略』第11～12（斎宮上、下）（文化末～天保初撰）（大神宮叢書）

神宮司庁編『神宮綜覧』（斎宮御歴代一覧表がある）（大正４年10月発行、同７年３月訂正再版）

付II　斎宮寮の殿舎

西暦	年号	内院				中院		外院			路	造営・火災	出典
771	宝亀 2											造斎宮 （鍛冶正従五位下気太王）	続日本紀
775	〃 6											伊勢斎宮修理	〃
785	延暦 4											造斎宮長官 （従五位上紀朝臣作良）	〃
814	弘仁 5			大盤所									太神宮諸雑事記
839	承和 6											官舎100余宇焼く（離宮院）	続日本後紀
867	貞観 9											官舎12宇焼く	三代実録
881	元慶 5											斎宮雑舎修理	続日本後紀
895	寛平 7											造斎宮使 （大宮司大中臣臣善兼任）	二所太神宮例文
899	昌泰 2											斎宮未修理	西宮記
922	延喜 22											斎宮寮失火	扶桑略記
927	延長 5	内院	神殿・寝殿	出居殿	御川・池		造寮・厨家		官舎・諸司 雑舎・井	南門・大庭			延喜式
				庭・中重庭	南門				厨家・酒殿 寮庫	溝湟・東湟 大垣			
933	承平 3											斎宮修造 （正六位上大中臣朝臣頼行）	類聚符宣抄
934	〃 4						寮庁						太神宮諸雑事記
962	応和 2									南門・御階			〃
978	天元 元			だいばん所	やり水 みかはの池								斎宮女御集
981	〃 4											斎宮寮雑舎13宇火	日本紀略
991前	正暦2前				やり水								夫木和歌抄
1013	長和 2									門	南小路		小右記
1026	万寿 3											斎宮所々損色文、大風・野火	〃

西暦	年号	内院				中院		外院			路	造営・火災	出典
1031	長元 4						寮頭館・禾倉						太神宮諸雑事記
1037	長暦元											造伊勢斎宮使 （大神宮司正六位上大中臣朝臣兼任）	類聚符宣抄
1040	〃 4								蔵部司倉			蔵部司倉1宇焼亡	春記
1045	寛徳 2			御匣殿									太神宮諸雑事記
1048	永承 3		御殿・御汗殿							西鳥居			〃
1049	〃 4						駅官院						〃
1057	天喜 5				南門								〃
1060	康平 3		御汗殿										〃
1063	〃 6		御匣殿						進物所				〃
1066	治暦 2		西陣・西面妻戸・下板敷・南面御前・西面						進物所				〃
1074	承保元									北門	南路		経信卿記
1075	〃 2											造斎宮使覆勘文	水左記
1083前	承暦中											三箇院数10宇殿舎造進 （散位従五位下大中臣朝臣公隆）	朝野群載
1090	寛治 4										南門 堀川		江記
1092	〃 6		戸口垂板敷・東廊								南門		江家次第
1105	長治 2	内院	御匣殿									斎宮寮修理間定あり	殿暦
〃	〃											斎宮寮近日顚倒	中右記
〃	〃											造斎宮寮功 （大中臣公長神祇祐任）	〃
〃	〃									南門	西路 北路		長治二年 勅使記
1107	嘉承 2		御殿東庇							南門			嘉祥二年 内大臣雅実勅使記

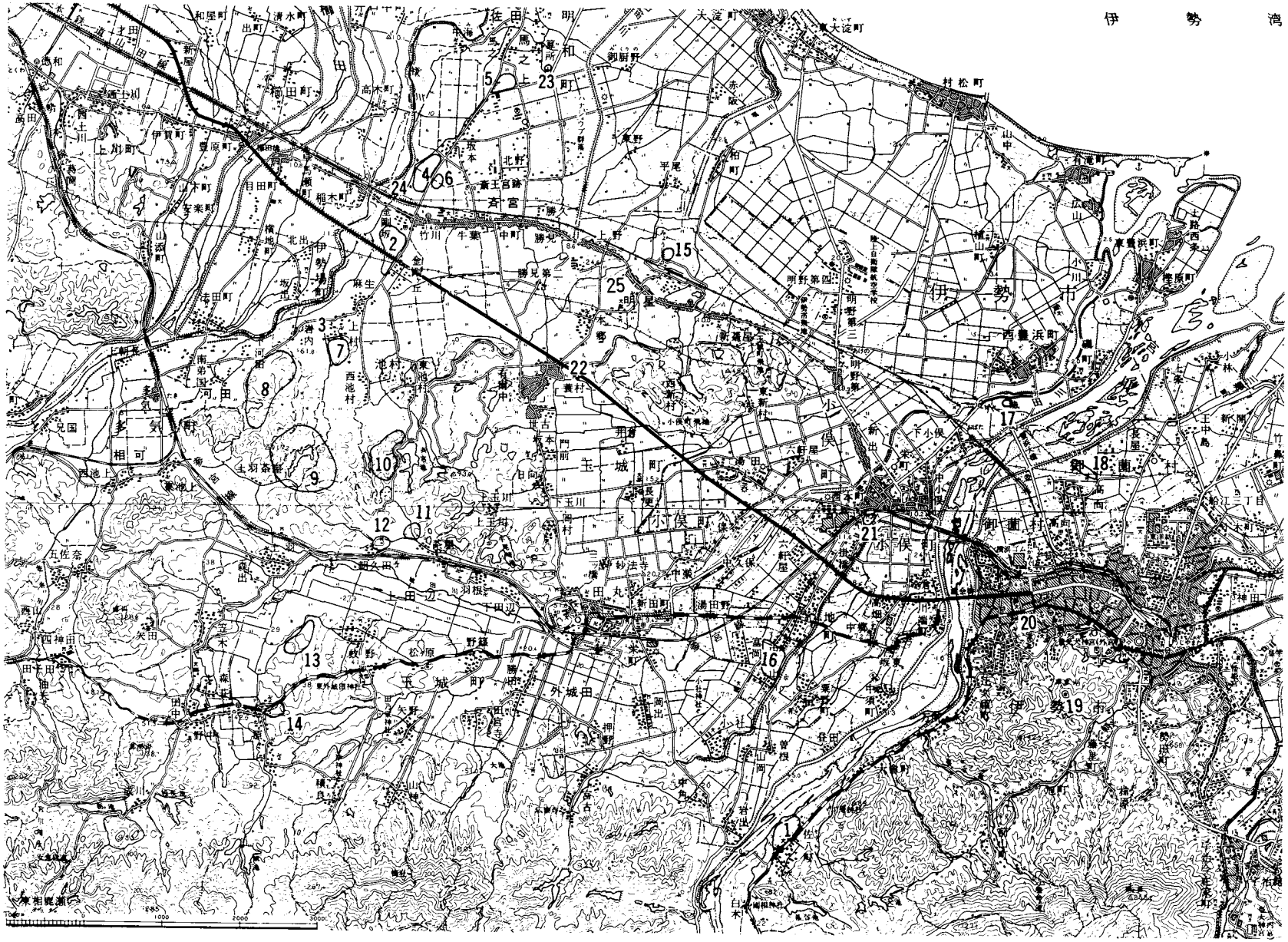
西暦	年号	内院				中院		外院			路	造営・火災	出典
1107	嘉承 2			(内侍宿所)	(井)(湟)								中右記
1114	永久 2									南門			〃
1118	元永元											造斎宮三ヵ院功 (大中臣公隆大宮司任)※	二所太神宮例文
1125	天治 2											斎宮造宮	中右記目録
1132	天承 2	内院	中御殿										山槐記・建保5年条
1133	長承 2				南門								中右記
〃後	〃後							外院				修造	皇大神宮祢宜補任次第
1141	永治元							外院				功(大中臣公宗大宮司任)※	二所太神宮例文
1143	康治 2											斎宮寮二ヵ院造進功 (大中臣親章神祇少副任)	公卿補任
1144	天養元	内院	神殿										本朝世紀
1153	仁平 3	内院	殿舎	門・鳥居・築垣								造営	皇大神宮祢宜補任次第等
〃	〃	内院											本朝世紀
1154	〃 4					中院						功(大中臣親章四位叙)	公卿補任
1156頃	保元頃	内院				中院		外院					新任弁官抄
1167	仁安 2	内院				中院							平安遺文 3434
1172	承安 2						寮頭館						百錬抄
1174	〃 4	内院										功(大中臣親俊従四位下叙)※	公卿補任
1177	治承元										南路		治承元年 公卿勅使記
1187	文治 3							外院				功(少司大中臣隆時正六位上叙)	類聚大補任
1189前	文治頃				ついがき								山家集

西暦	年号	内院				中院		外院			路	造営・火災	出典
1191	建久 2			宣旨曹司	井								都玉記
1201	建仁元	内院				中院						修造功（権大司大中臣長能従五位下叙）	類聚大補任
1213	建保元											造斎宮寮重任功（大司従五位下大中臣康定）	〃
1217	〃 5		御殿				駅官院						〃
1219	〃 7					中院							嘉元二年仮殿遷宮記
1221	承久 3						頭宿館						類聚大補任
1228	安貞 2					中院						造宮重任功（大司従五位下大中臣頼重）	〃
1231	寛喜 3					中院						〃（〃）	〃
1239	延応元					中院						〃（大司従五位下大中臣盛房）	〃
1242	仁治 3		御櫛笥殿										百錬抄
〃	〃						頭宿館						類聚大補任
1243	寛元元					中院						重任功（宮司大中臣盛房）	〃
1262	弘長 2					中院						殿舎未作（大司大中臣尚長）	〃
1265	文永 2					中院							〃
1272	〃 9		御匣殿				頭宿館						〃
1306	嘉元 4					中院						造営難（大司大中臣長光）	二所太神宮例文

○ 斎宮寮の殿舎については、つぎのものに拠る他、古記録（刊本）による。
　蘭田守良『神宮典略――殿舎考』　（大神宮叢書）
　御巫清直『神宮神事考證――斎宮寮考證』（　〃　）
　福山敏男「斎宮寮略年表」（三重県教育委員会『古里遺跡斎王宮趾』1973　所収）
○ 古記録（刊本）は、臨川書店覆刻版「増補史料大成」及び岩波書店版「大日本古記録」による。
○ 諸殿舎の内中外院の区別は、主として上記、御巫清直「斎宮寮考證」に準拠した。
○ 「造営・火災」欄の※印は、成功であっても、当人の父の功によるものであることを表わす。

図　　版

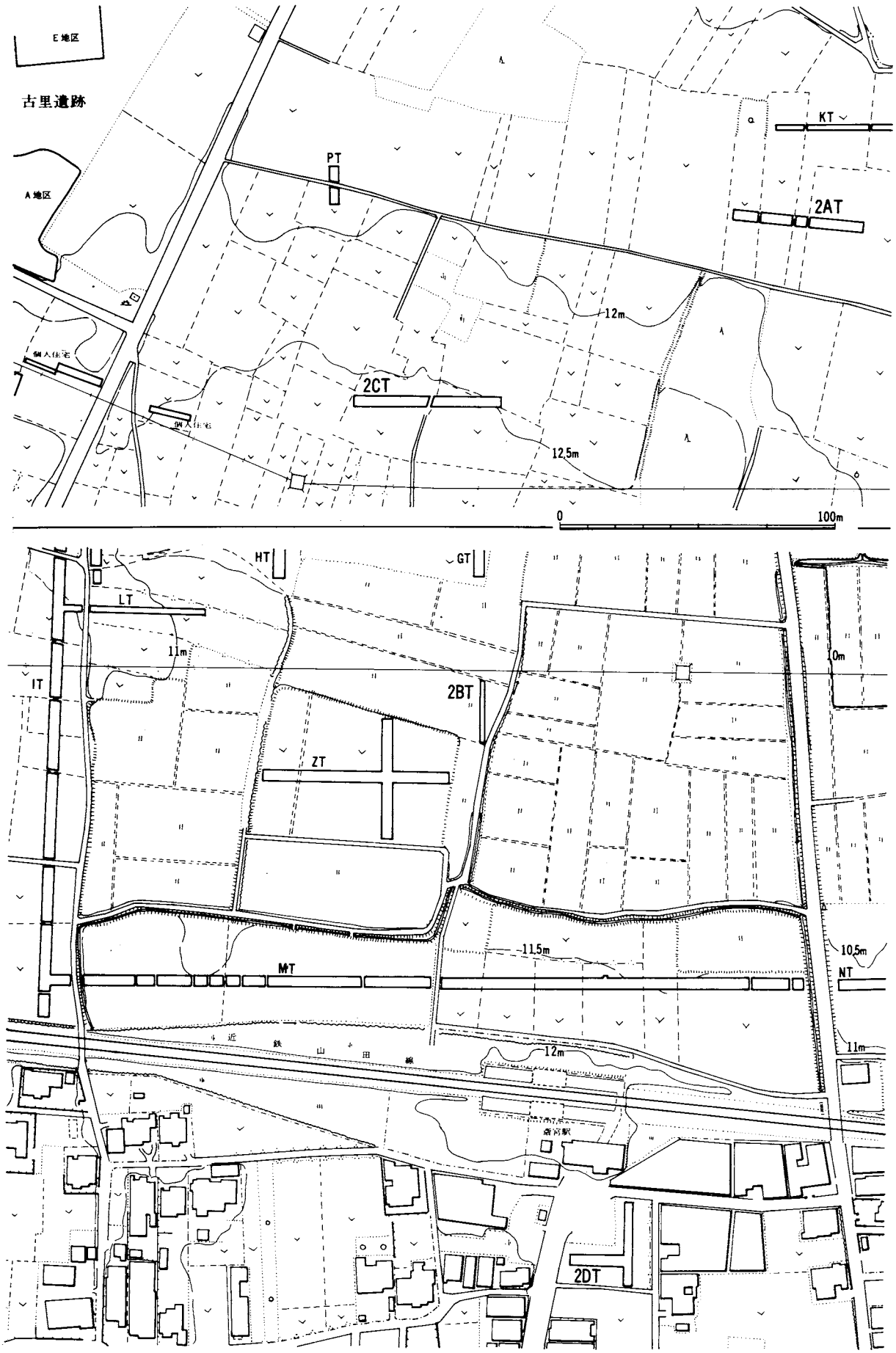
1. 佐八遺跡
2. 金剛坂遺跡
3. 神前山古墳
4. 古里遺跡
5. 坂本古墳群
6. 塚山古墳群
7. 天皇山古墳群
8. 河田古墳群
9. 上村池古墳群
10. 斎宮池古墳群
11. 上田辺古墳群
12. 朝久田古墳群
13. ボウズ山古墳群
14. 原古窯址群
15. 明星古墳群
16. 中楽山遺跡
17. 大藪遺跡
18. 高向遺跡
19. 高倉山古墳
20. 小町経塚
21. 度会離宮院
22. 鳥墓神社
23. 隆子内親王墓
24. 竹神社旧地
25. 水池土器製作址



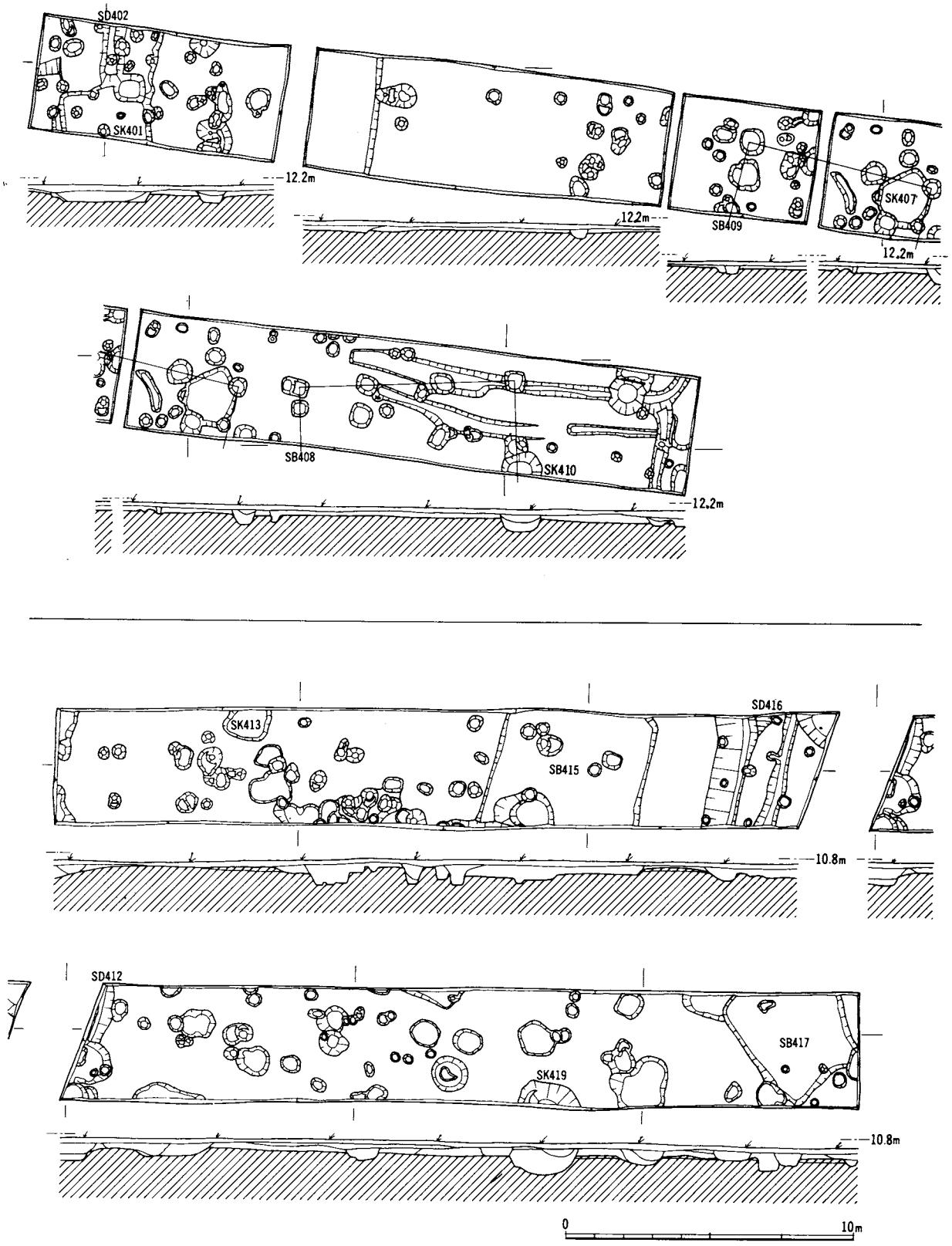
斎王宮跡位置図（1：50000　松阪・伊勢　国土地理院）

PL1

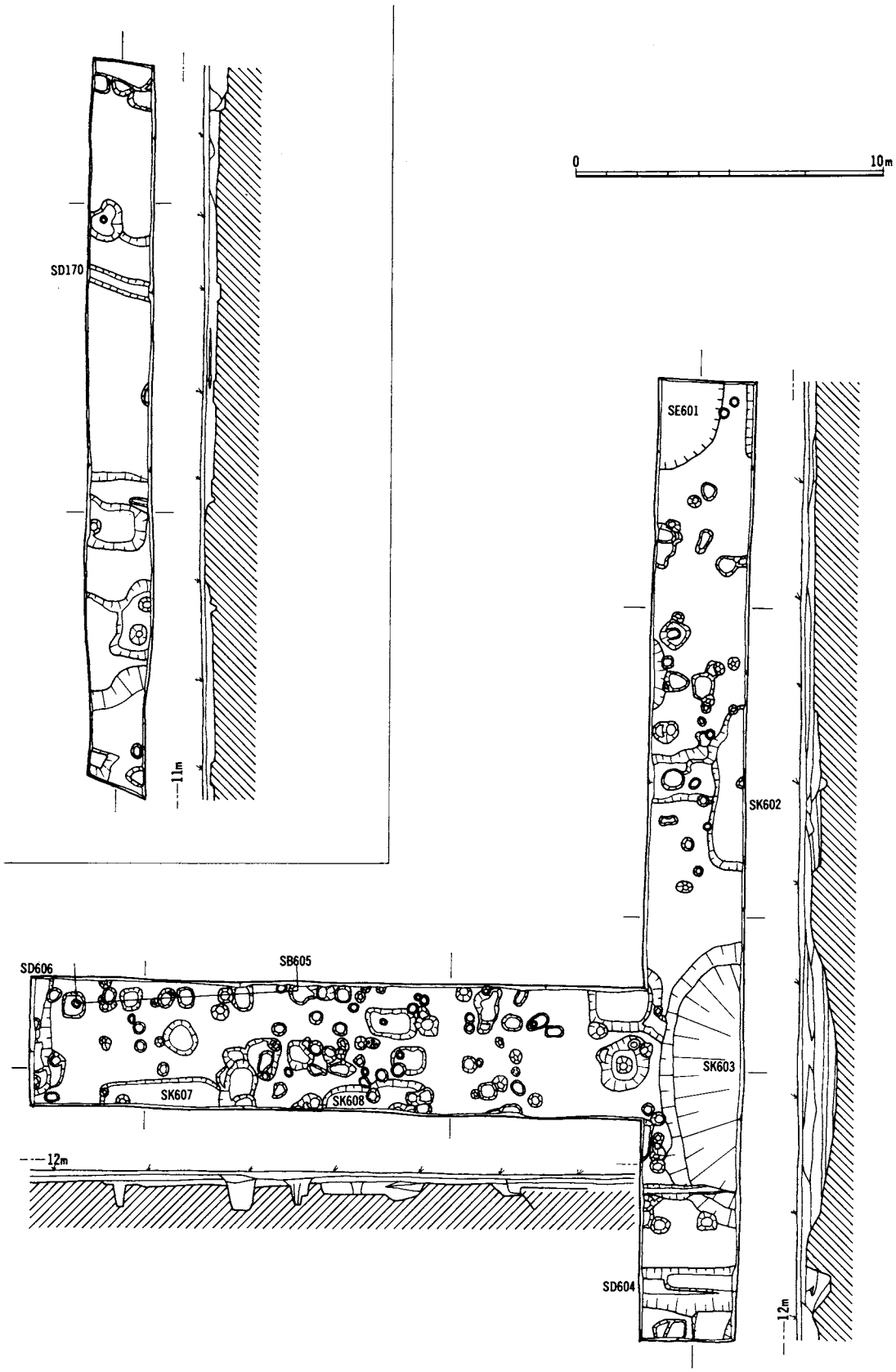
斎王宮跡地形図及び小字名図（1：5000）



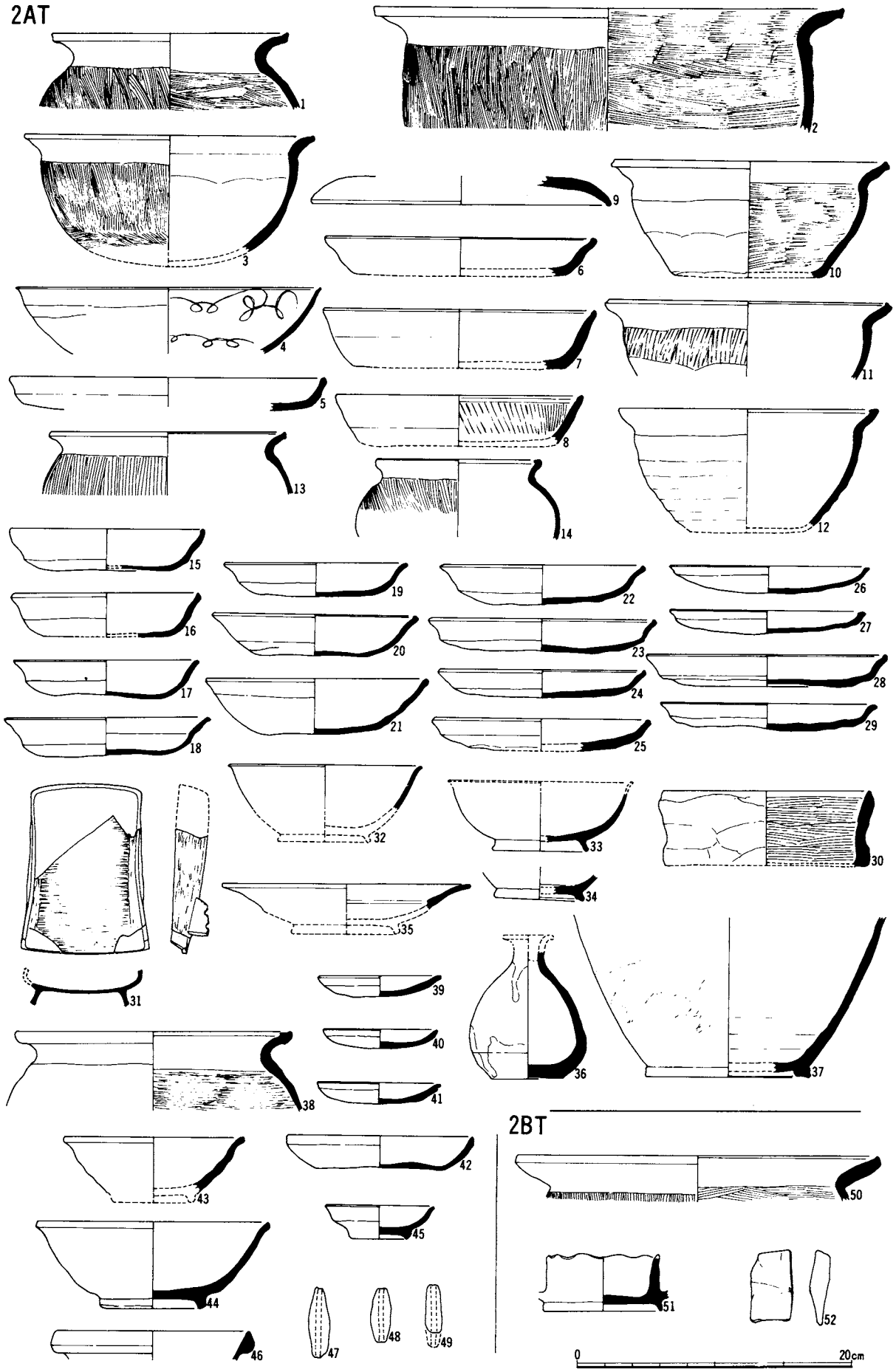
2A～2Dトレンチ位置図（1：2000）



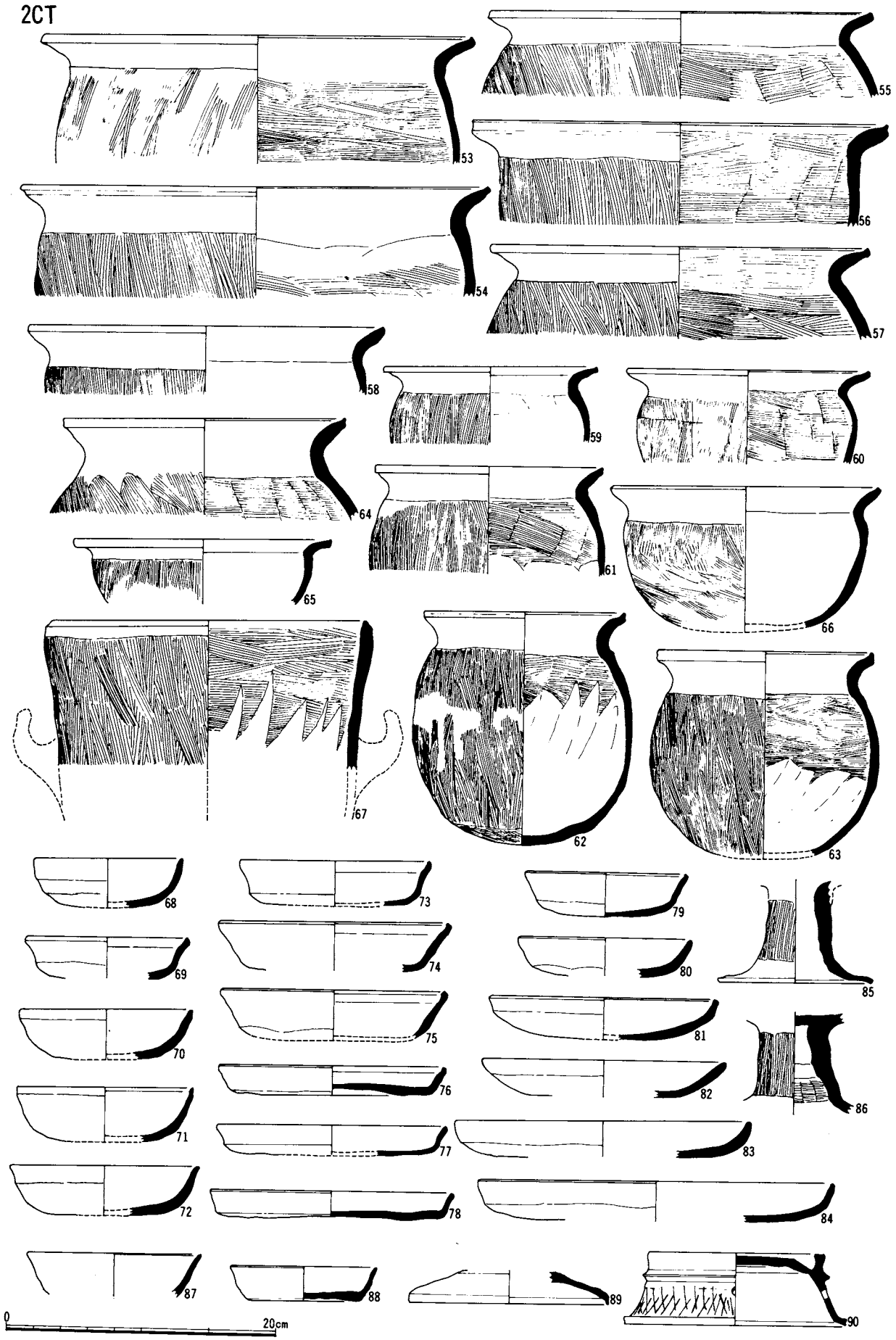
2A・2Cトレンチ平面図（1：200）



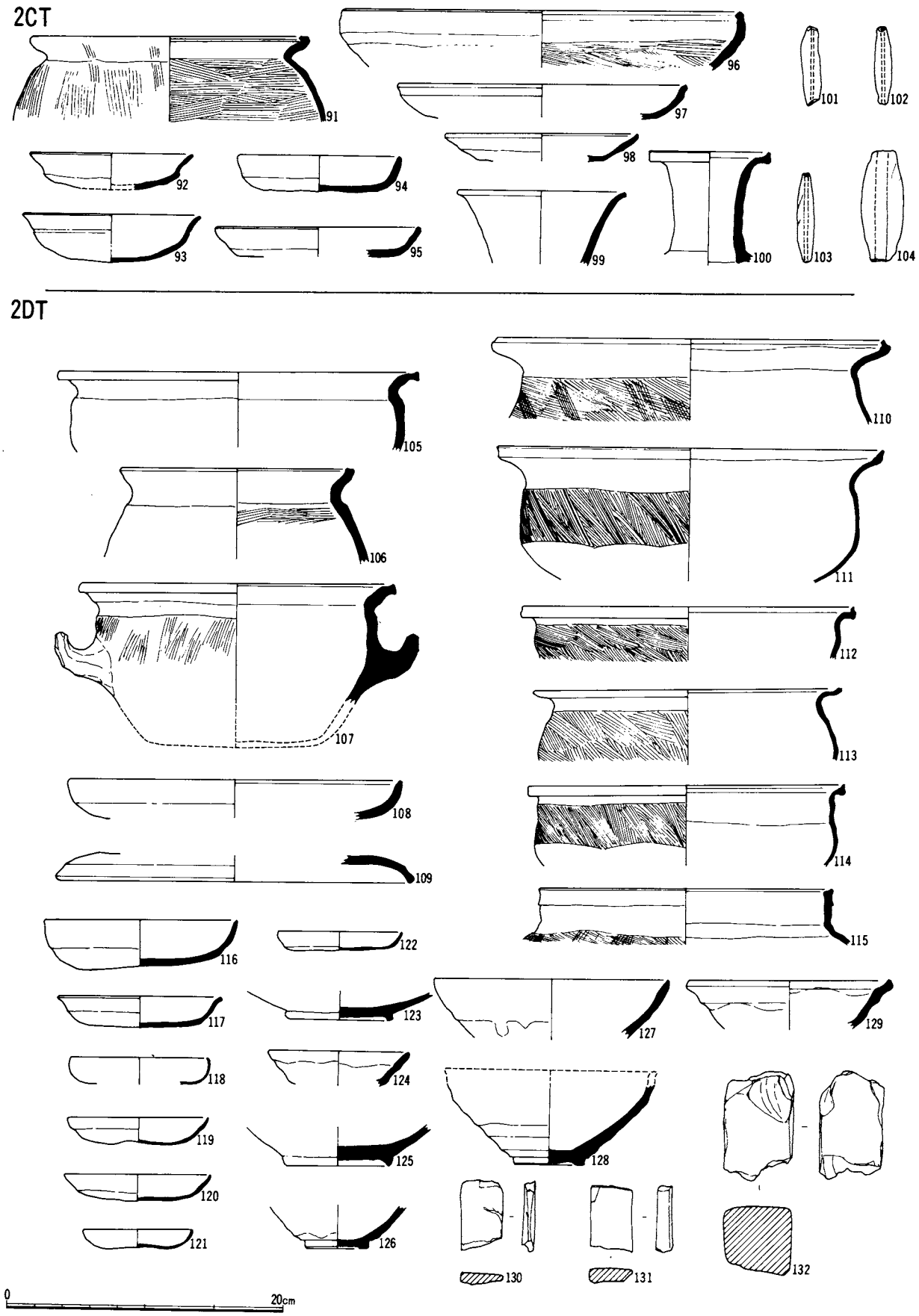
2B：2Dトレンチ平面図（1：200）



2A・2Bトレンチ遺物実測図（1：4）



２Ｃトレンチ遺物実測図（１：４）

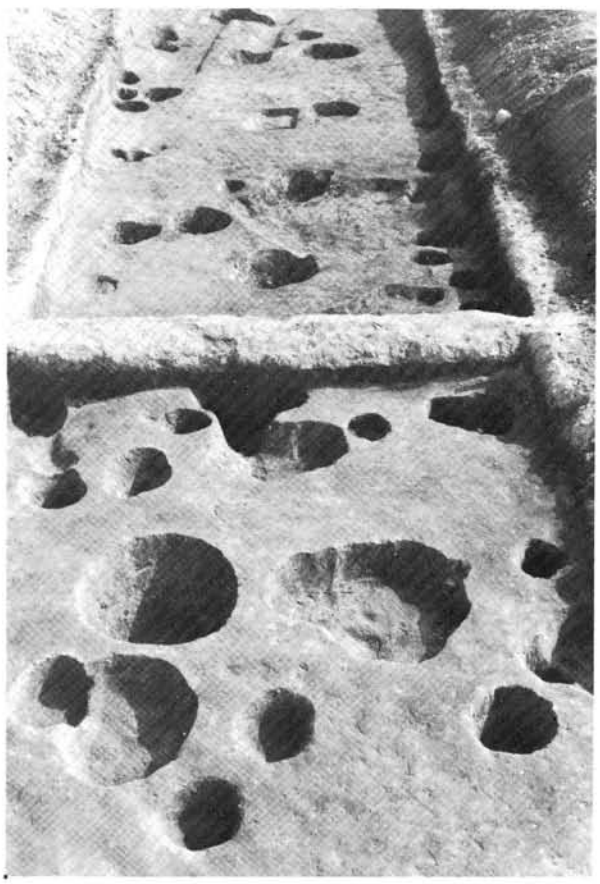


2Dトレンチ遺物実測図（1：4）

斎王宮跡航空写真

2Aトレンチ全景（東より）

2Aトレンチ全景（西より）

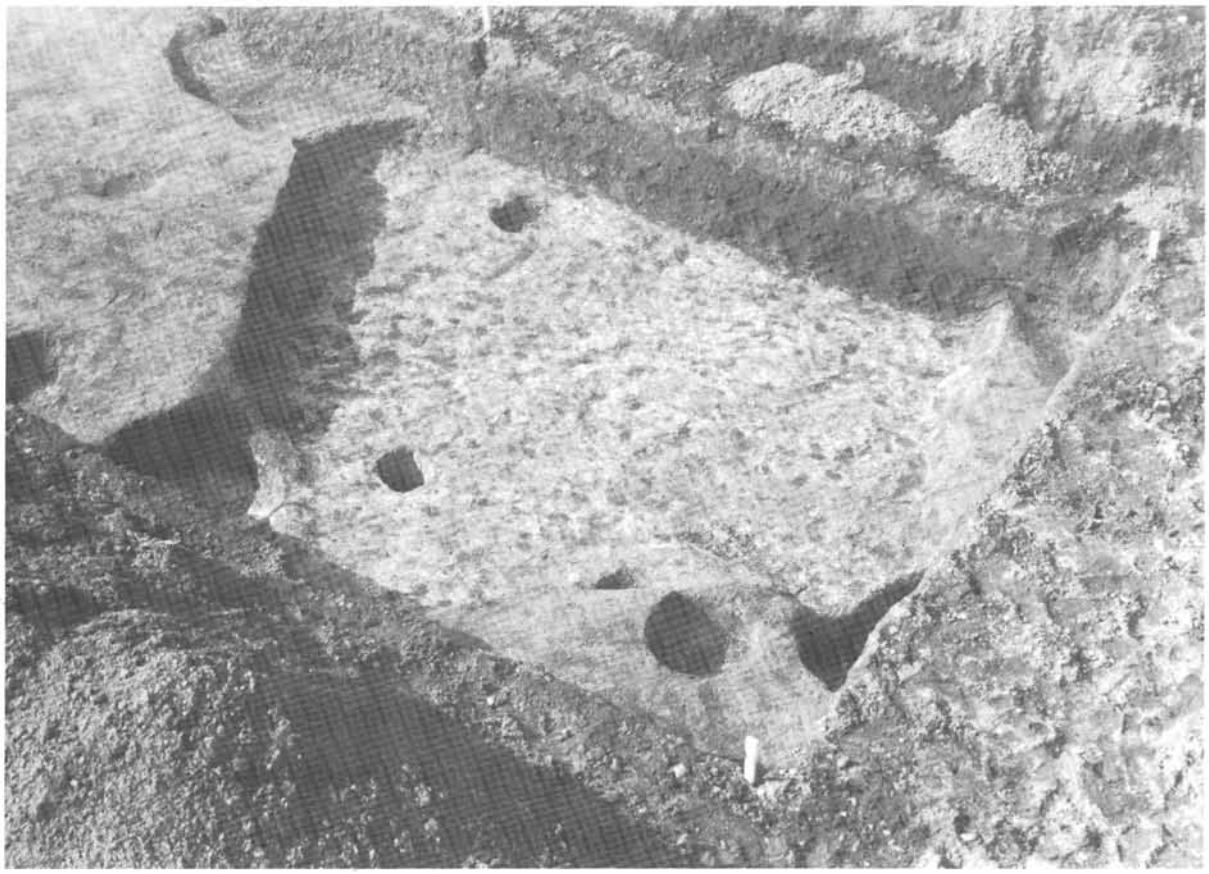


2AトレンチSB409

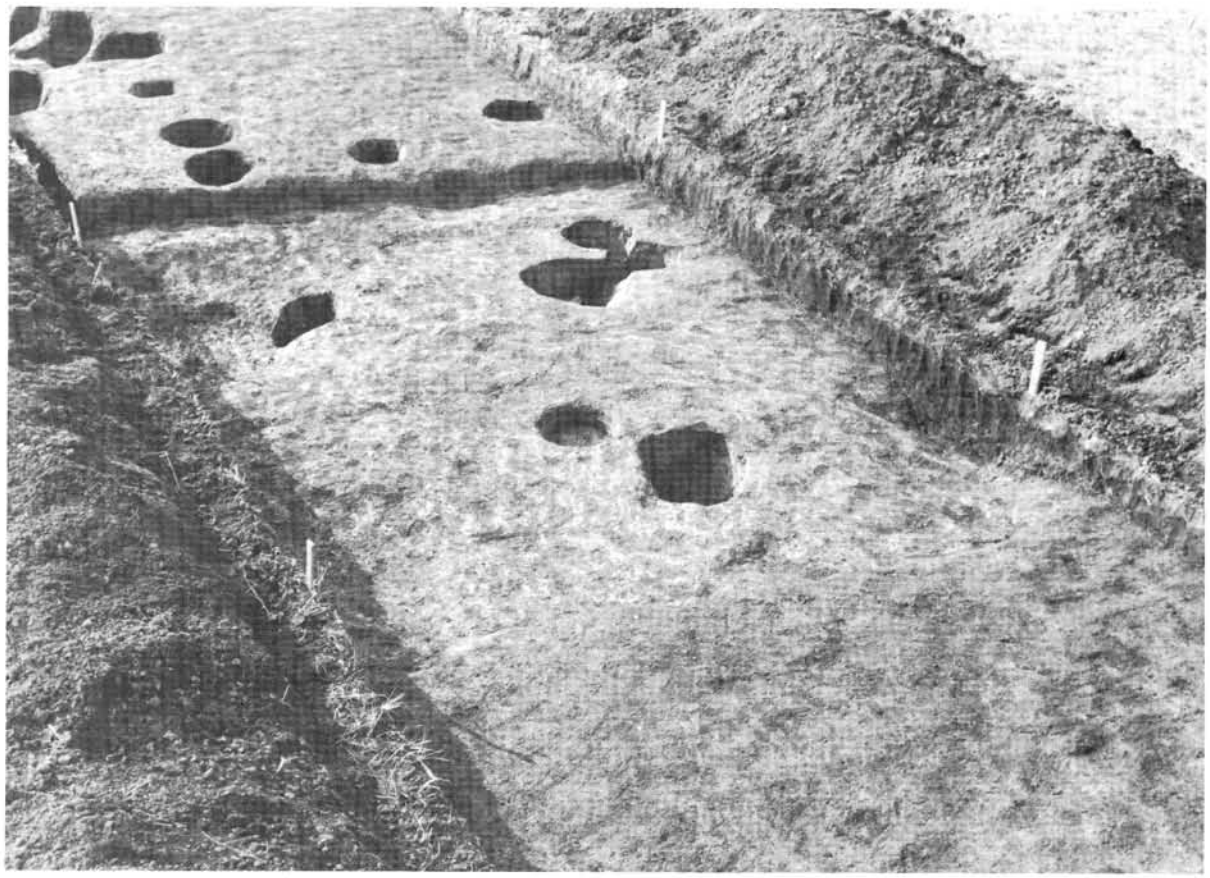
2Aトレンチ SK407、SB408

2Bトレンチ全景（北より）

2Cトレンチ全景（東より）



2CトレンチSB417

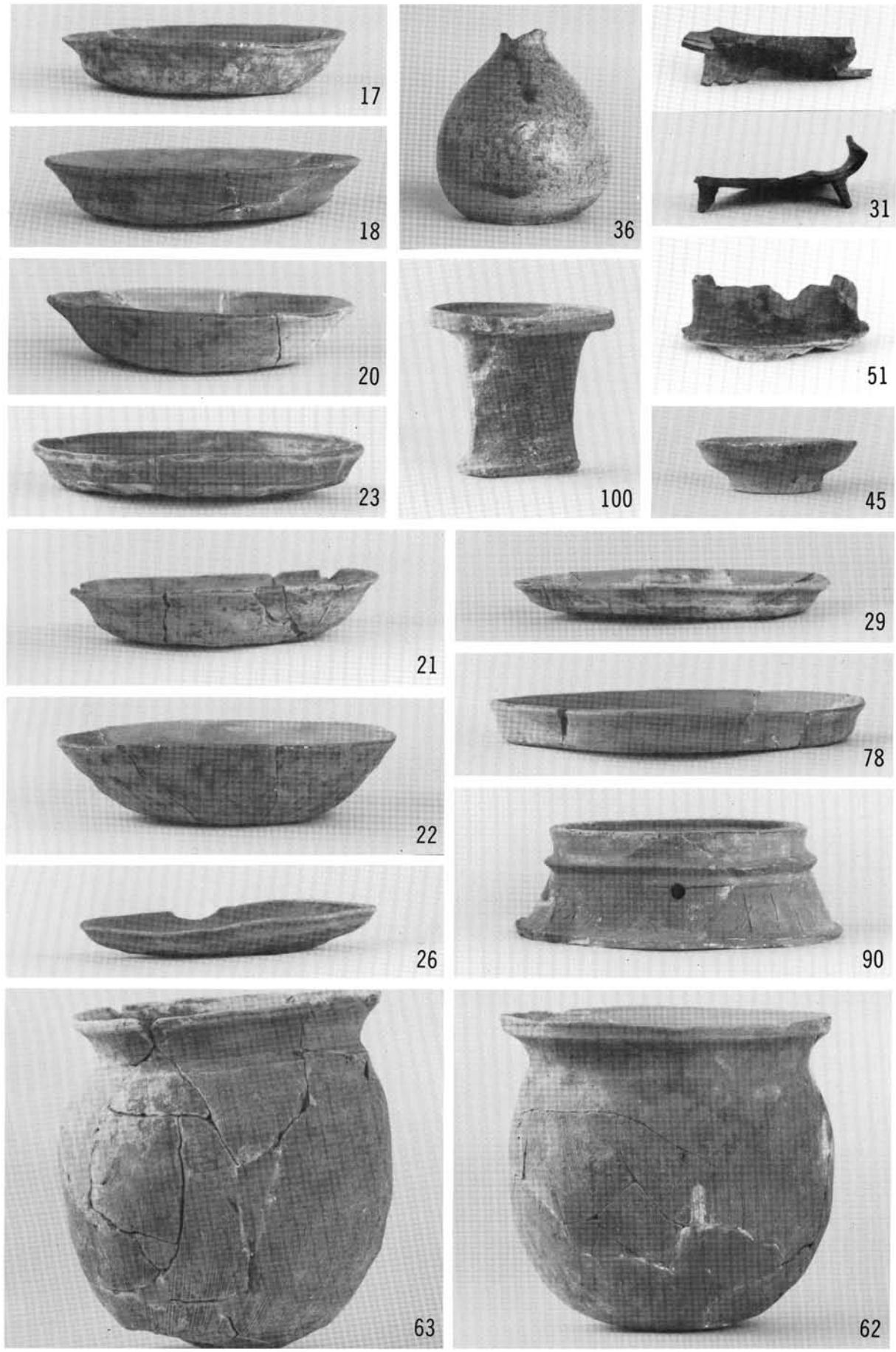


2Cトレンチ S B415

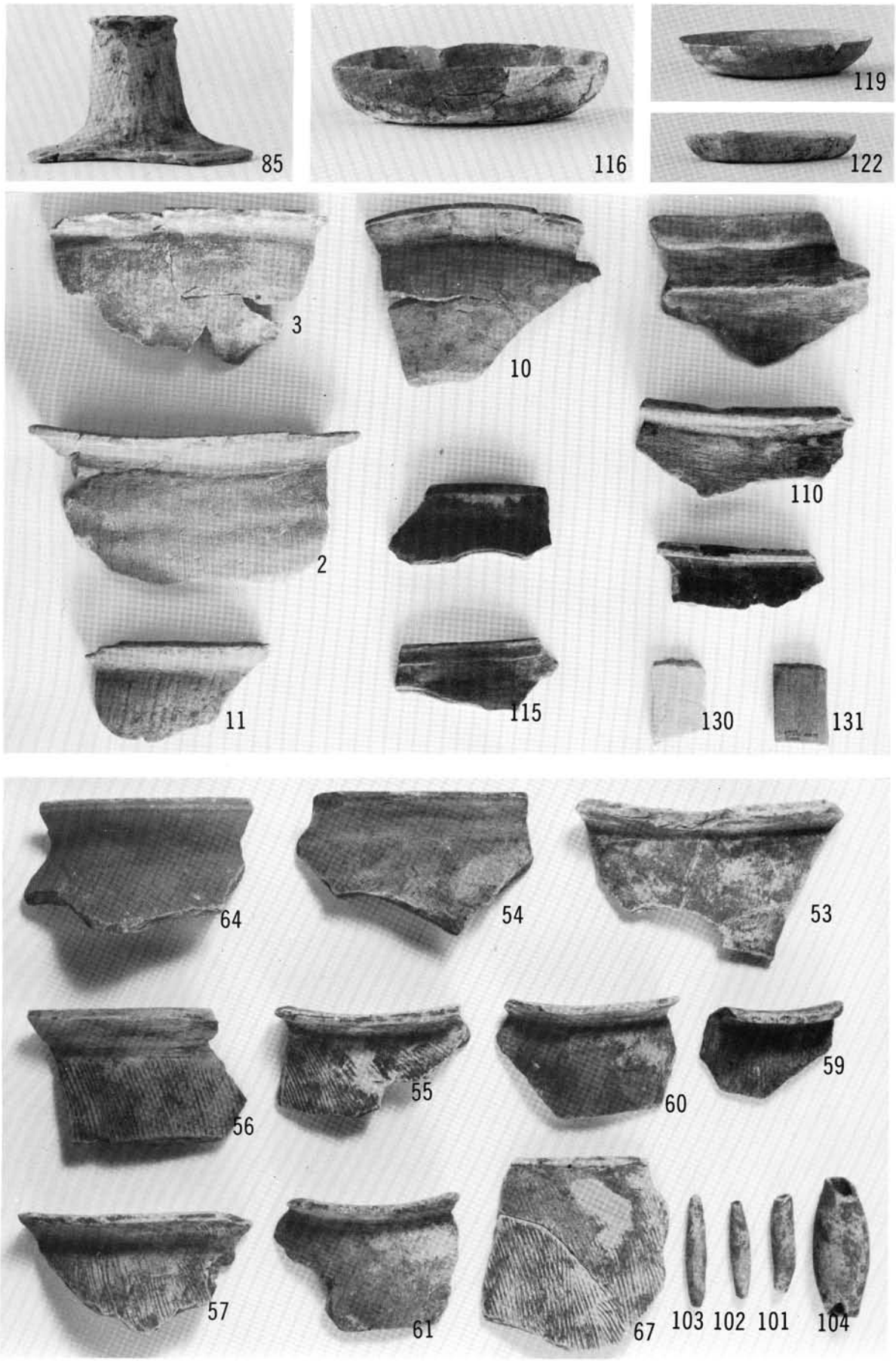
2Dトレンチ全景（南より）

2Dトレンチ（東より）

2DトレンチSK602



出土遺物（1：3）


85
116
119
122
3
10
2
110
11
115
130
131
64
54
53
56
55
60
59
57
61
67
103 102 101
104

出土遺物（1：3）

昭和52（1977）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告33

斎王宮跡発掘調査報告Ⅳ

昭和52年３月31日

編　集
発　行　　三重県教育委員会

印　刷　　オリエンタル印刷株式会社